

酒前茶後錄

八

大正七年九月下浣起筆

特別
14
1919
324



酒前茶後録八

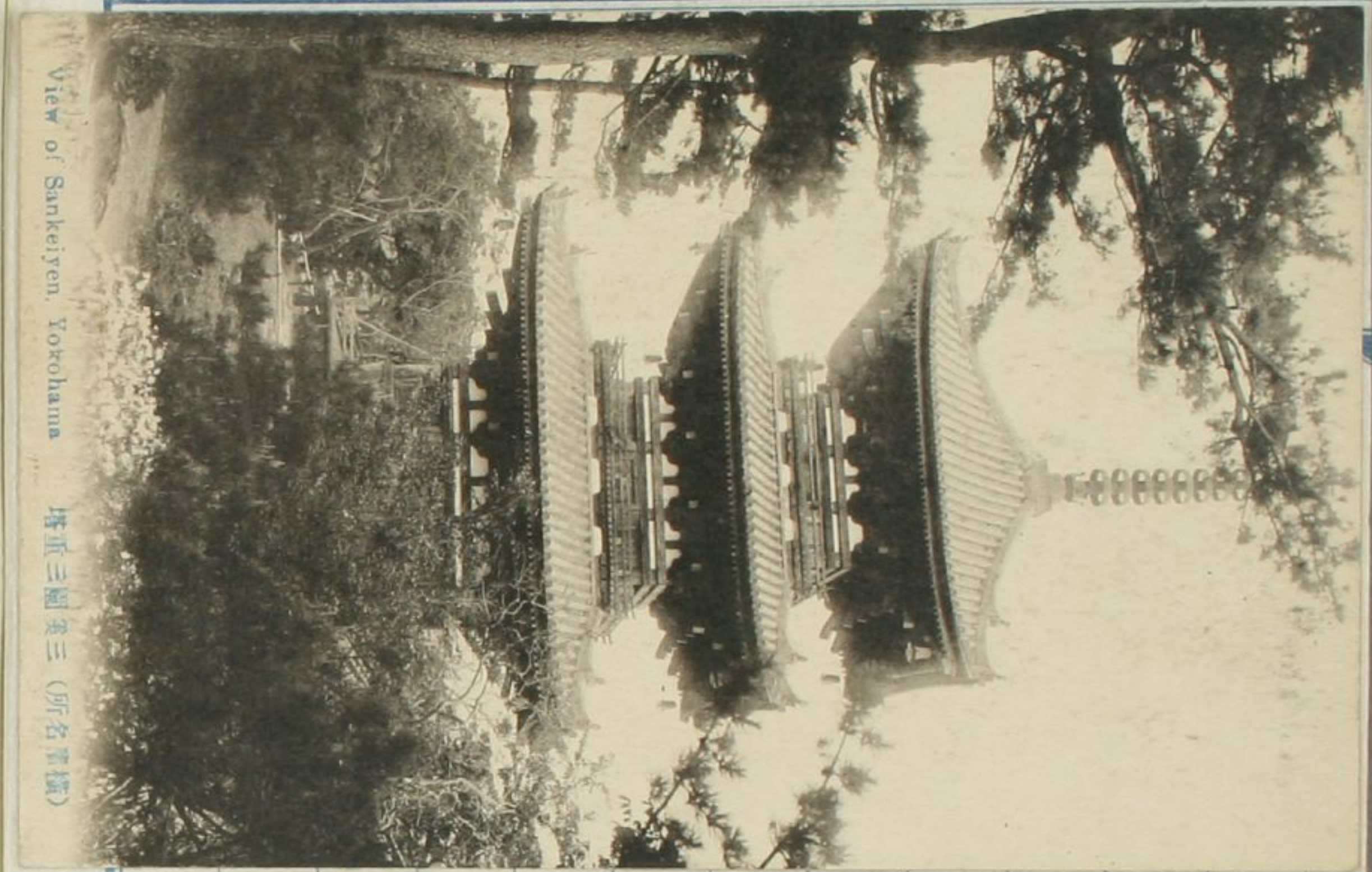
大正七年九月二十七日赴京

の横濱の原宿方面の一の別荘三三花園の山々々々市表
 に往きんた庭子の雄と月旦さんて居るが未だ一
 元の機を得る事つらから、此後備に真崎信成出京し
 て是れ又いといと云ふ、多々四角の前をぬきて流るは、
 園の本牧海岸にあり横濱驛頭より本牧行の電車
 に乗し二十回五分ほど本牧に下車し、三四軒歩すと此
 の園に参る、今川公園七日横濱放しと何人とも自在に
 出入を許してをる
 園の大勢を云ふと海岸に突出する丘陵の双方に在り



View of Sankeiyen at Yokohama

横濱三溪園内全景



View of Sankeiyen, Yokohama

塔重三園集三 (所名漢撰)



View of Sankeiyen, Yokohama 庭月林園溪三 (所名漢撰)





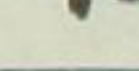

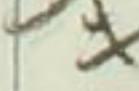
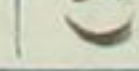



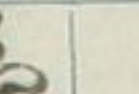
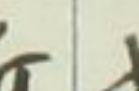

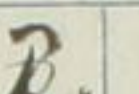





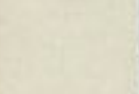

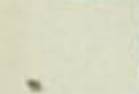
View of Sankeiyen, Yokohama

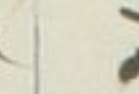

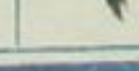





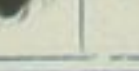
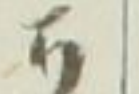
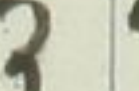
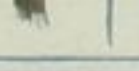


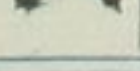
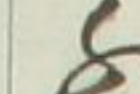
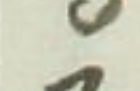
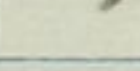



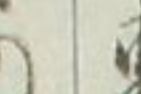




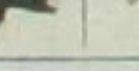


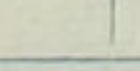
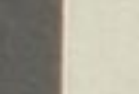
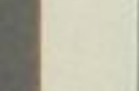
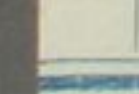



池蓮ノ園溪三 (所名漢撰)

て、その丘陵の中間が割合、狭く明き、**●**丘陵
方の平地は海岸に近きところを越すと、地形は、海岸
にあり、高き、高き地を登り、海に下り、又、海
所、却つて趣く、ある、平坦、国々、人々、多し、海に
うき、地形、**●**と思ふ、所々、却つて、興味、
ふ、平地、**●**と大なる池、あり、**●**左手の丘
陵に接し、**●**池、**●**を為、花、**●**も、つて、寒、
橋、**●**架し、**●**左手の丘陵、**●**あり、**●**橋、
そ、**●**此、**●**園、の、**●**眼、**●**目、**●**た、**●**左、**●**手、**●**の、**●**丘、**●**陵、**●**は、**●**右、**●**手、**●**を、**●**抜、**●**て、
亦、**●**地、**●**を、**●**望、**●**む、**●**は、**●**唯、**●**た、**●**世、**●**昔、**●**を、**●**な、**●**る、**●**山、**●**に、**●**格、**●**お、
興、**●**味、**●**七、**●**感、**●**せ、**●**の、**●**中、**●**に、**●**入、**●**り、**●**を、**●**見、**●**る、**●**と、**●**う、**●**も、
近、**●**う、**●**激、**●**ら、**●**し、**●**て、**●**ある、**●**此、**●**の、**●**丘、**●**陵、**●**の、**●**海、**●**岸、**●**に、**●**寄、
十二

此、**●**不、**●**一、**●**あ、**●**り、**●**の、**●**丘、**●**陵、**●**は、**●**近、**●**互、**●**し、**●**て、**●**る、**●**其、**●**上、
三重塔の古建、**●**築、**●**の、**●**樹、**●**木、**●**湖、**●**に、**●**草、**●**を、**●**抜、**●**て、
此、**●**立、**●**し、**●**を、**●**居、**●**る、**●**こ、**●**ん、**●**、**●**全、**●**国、**●**に、**●**風、**●**改、**●**を、**●**興、**●**つ、**●**る、**●**大、
る、**●**もの、**●**こ、**●**ん、**●**の、**●**興、**●**げ、**●**ん、**●**に、**●**恐、**●**く、**●**眼、**●**目、**●**を、**●**缺、**●**く、**●**ひ、
う、**●**池、**●**し、**●**を、**●**平、**●**地、**●**と、**●**池、**●**の、**●**お、**●**り、**●**又、**●**る、**●**こ、**●**の、**●**興、**●**い、
在、**●**い、**●**み、**●**れ、**●**中、**●**建、**●**物、**●**や、**●**其、**●**他、**●**の、**●**建、**●**物、**●**右、**●**方、**●**に、**●**い、
ある、**●**が、**●**何、**●**と、**●**も、**●**行、**●**を、**●**中、**●**に、**●**し、**●**き、**●**觀、**●**あり、**●**平、
地、**●**と、**●**更、**●**ら、**●**行、**●**り、**●**之、**●**風、**●**を、**●**要、**●**す、**●**故、**●**に、**●**感、
ん、
ん、

丘陵即ち園中の山を駆け登りて見ると、いろくらの風
う、**●**整、**●**と、**●**初、**●**見、**●**を、**●**之、**●**の、**●**昔、**●**心、**●**の、**●**ある、**●**所、**●**に、**●**知、**●**ら、**●**此
の園の特長も、**●**も、**●**之、**●**の、**●**三、**●**重、**●**塔、**●**と、**●**知、**●**り、**●**神、**●**社

伊弉諾宮等種々の建物の歴史上由緒のあるものを
集めてそれの所とあると云ふ。河内の勸心寺の神社
七あるハ大元大雄の由縁のある宮寺七あるハ大神宮七
あるハ御倉七ある、枕山時代の建物は七鎊屋七
山中の遺物をとりて見る、三重塔七、山成の集寺の
七のを、 取らまれば、 園の廣さ、 是れを、
大元大雄の、 一、 の建梁物の、 一、
左社寺の標を、 一、 一、 一、
ら、 一、 一、 一、
多、 一、 一、 一、
見、 一、 一、 一、
木を以て掩い、 一、 一、 一、

目云ふは、 一、 一、 一、
登つて、 一、 一、 一、
歩、 一、 一、 一、
を、 一、 一、 一、
り、 一、 一、 一、
大、 一、 一、 一、
八、 一、 一、 一、
七、 一、 一、 一、
軒、 一、 一、 一、
ら、 一、 一、 一、
の、 一、 一、 一、
但、 一、 一、 一、

支那も風味の一物で、清けな、その所帯の、
 婦らも庭もまじ支那風な、生るる、うつくしき、
 女、園中へ自分も、風味を感し、比の、
 此園、~~支那~~風味同し、風味を、
 支那、~~支那~~煉化二層の家を、
 友が、~~支那~~穿ち、~~支那~~作本園、
 此、~~支那~~と云ふこと、~~支那~~の、
 此、~~支那~~あり、~~支那~~奥本、
 を下ると、~~支那~~海、
 地の思、~~支那~~、
 海岸、~~支那~~長方、
 を、~~支那~~、
 十二

支那も風味の一物で、清けな、その所帯の、
 婦らも庭もまじ支那風な、生るる、うつくしき、
 女、園中へ自分も、風味を感し、比の、
 此園、~~支那~~風味同し、風味を、
 支那、~~支那~~煉化二層の家を、
 友が、~~支那~~穿ち、~~支那~~作本園、
 此、~~支那~~と云ふこと、~~支那~~の、
 此、~~支那~~あり、~~支那~~奥本、
 を下ると、~~支那~~海、
 地の思、~~支那~~、
 海岸、~~支那~~長方、
 を、~~支那~~、
 十二

支那も風味の一物で、清けな、その所帯の、
 婦らも庭もまじ支那風な、生るる、うつくしき、
 女、園中へ自分も、風味を感し、比の、
 此園、~~支那~~風味同し、風味を、
 支那、~~支那~~煉化二層の家を、
 友が、~~支那~~穿ち、~~支那~~作本園、
 此、~~支那~~と云ふこと、~~支那~~の、
 此、~~支那~~あり、~~支那~~奥本、
 を下ると、~~支那~~海、
 地の思、~~支那~~、
 海岸、~~支那~~長方、
 を、~~支那~~、
 十二

か之れを以てと好義の軍しのみは改めやせりて元格し
て其行を許し以て為りし脚色支離滅裂を以て其味を
死せるが、カレモ此の股装やその意や態や性癖
を以て細く描くも構へもある、興味を感ずる所は此を
みあはせしむべきである、猶更なる感下の盟を以て聯
合各目目の司令なきの獨の白聖路を以てカイセン
にあらざる直先を以てする女はうもいくらう興味を感ずる
ものや、丑末利の出来にその丈にすぎぬ女ありか
位である、さう、目を人より快感を感ずる起るぬ此の言
を先き以て審判の視境より併し以て審判の言
を以て見れば

○文の切合の出版部は文の考査を以て其意の

物次を決定して後耳端よりそのお祭を一
掃し余りなきは其の衝にあること、さうして大
略の前巻の末に記し、か、さ、文の切合の
幹、其、乾、名、北、極、名、の、之、底、無、き、能、く、美、の
依、實、騰、者、に、代、り、て、切、合、の、出、版、を、其、業、を、以、て
読、す、る、の、を、以、て、難、く、に、属、す、設、金、は、一、方、出、版
部、の、業、を、以、て、行、は、れ、る、と、す、る、も、切、合、の、切、合、の、反
映、を、以、て、何、等、の、の、方、法、に、依、り、切、合、の、之、れ、を、支、出
す、る、と、す、る、と、い、ふ、主、行、の、と、す、る、も、況、し、ん、特、向、を、以、て
各、を、毎、月、刊、行、し、早、の、清、浄、を、以、て、期、を、以、て、
る、と、す、る、は、其、意、を、以、て、出、す、の、方、法、を、以、て、書、き、し、る、
其、こ、の、切、合、一、行、の、切、合、を、以、て、出、す、の、切、合、を

蓄集することを得ざるは、本年の正月に於て、
七令の創設十週年にもあつた地時を以て、
令員と蓄集する。：着手せんと漸く蓄を決し
法を收支の簿を以て見れば別表のこととあり
を得たり。即ち二個年一箇二萬五千圓之流を
一統の令員と得んとせしむる者あり、その令員
ハ各々々年々なる圓を繰出するものなり。一年
とて、其の令員中二年に於て名を著る目論んる
時尚る流局：聴きのあり、其の令員中、其の
するもの物二万有る。：ん蓄の地は、その
力を得たり。その令員ハ此の令員と蓄集の流
困難あり。その令員ハ此の令員と蓄集の流

自七十七年十月收支豫算 (二十七年三月)

一金貳萬五千圓也

収入

特別賛助員贈出寄附金

一金貳萬五千圓也

支出

内

金五百圓也

大正七年九月迄ノ時局研究費
並諸準備費

金千八百圓也

自七十七年十月至同年十二月
三ヶ月分經費

翻譯事業費 六三〇円
時局研究費 三〇〇円
報酬 三六〇円
本部事務費 三六〇円
大坂支部費 一五〇円

金壹萬八千四百圓也

大正八年及九年中、二十七分
事業遂行諸費

別紙經費豫算ノ通リ

金 壹千五百圓也

募 集 費

募集專員半當給料、出張費、會費、印刷物費、通信費、其他諸雜費

金 壹千 圓也

十周年記念事業費

金 壹千 圓也

會長下及出張費

文明協會經費豫算 (一ヶ年分)

摘 要 金 額

翻 譯 事 業 費 二、五二〇。〇

原稿料、編輯員一名半當、編輯雜費

時 局 研 究 費 一、四〇〇。〇

東京大設計十二回會費、印刷並三連記配布費、謝礼、諸雜費、月百半圓、特別研究費、月五十圓

講 演 會 費 七〇〇。〇

東京大設計各一回回會

報 酬 一、四四〇。〇

理事長、編輯長、理事三名、監事、書記

本 部 事 務 費 一、四四〇。〇

事務半當、書記備員給料、借家料、諸雜費、臨時費

支 部 同 六〇〇。〇

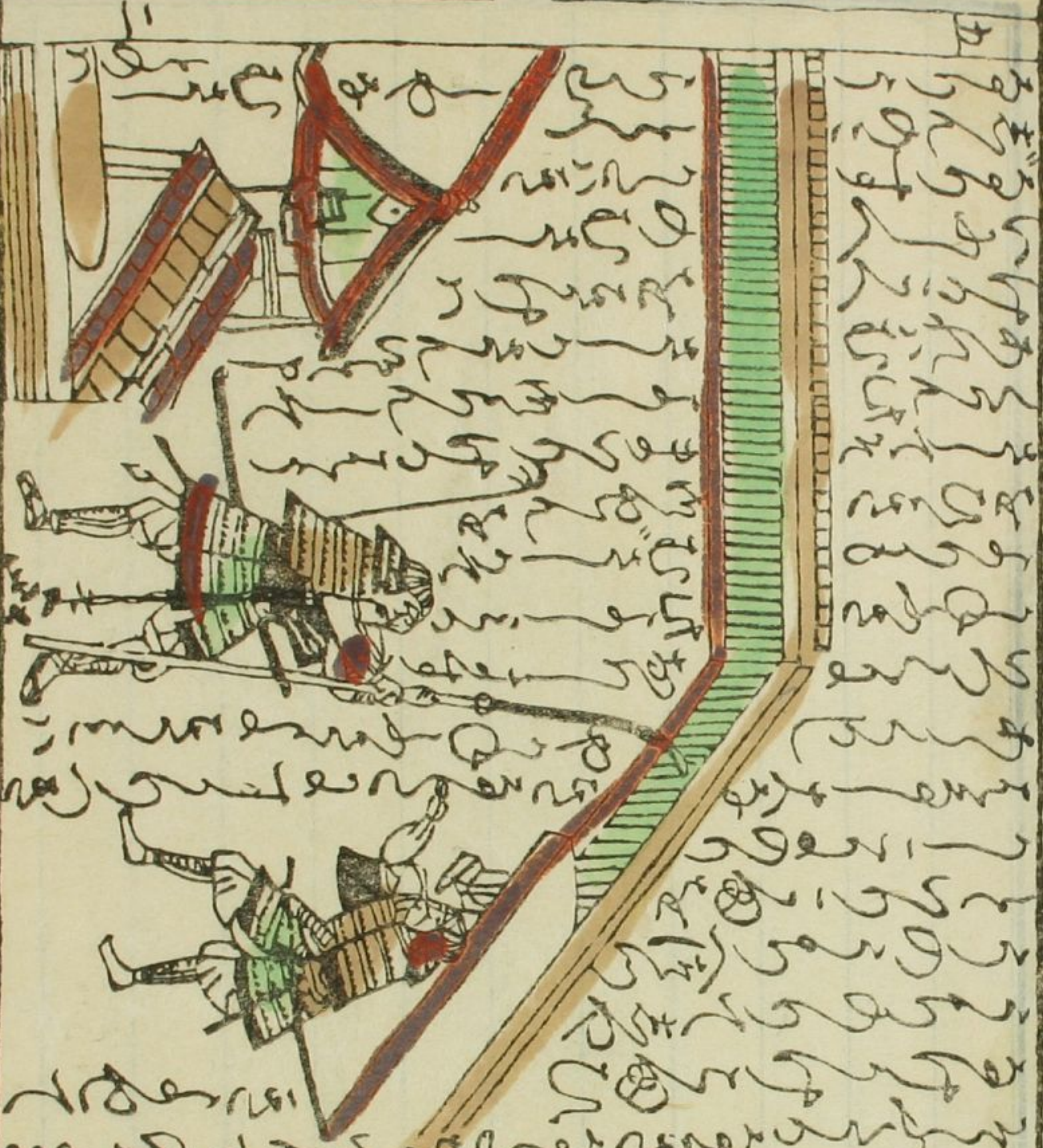
書記半當、借家料、諸雜費

計 九、一〇〇〇。〇

誠に来月の十週年紀念会を漸くの盛定也

○編者様お心より第三回の配本と進みたが、会費未比二
る名に満ず、あるが苦心中より、第三回配本本の一回高銀
五枚より乃ち二、二枚を収め、丹保橋本より、此方迄
永治王古浄院の跡中下なるき、この也、こゝんを
後、院を二の傳の挿入七普通の方と同し、こゝんを
其れを、挿入より、後を、二の、こゝんを、其れを
一、二の、こゝんを、其れを、二の、こゝんを、其れを

Handwritten text at the top of the left page, likely a title or introductory text.



Handwritten text at the bottom of the left page, continuing the narrative or providing commentary on the illustration.

地をわたりて正移せしめしことさう。後の好の事なり
 ありとて居る事のこと此上七うし志くし其代りて致味
 有るをさるゝ。此を安田善くゆ花なりと其尾尾尾
 永二年京都の法寺前跡兵衛湖殿と云う。揚子
 二枚落丁、別を絶るる符禱あり由なり。他の七を教の
 見ると浮世の道は教の事の心なりと云ふ事あり
 と云ふ條の刑行と思へる。凡俗の事なりと云ふ事
 入きこの也

天智天皇

秋の田でかりりたりのひねき
あわさるゝとまのりけは



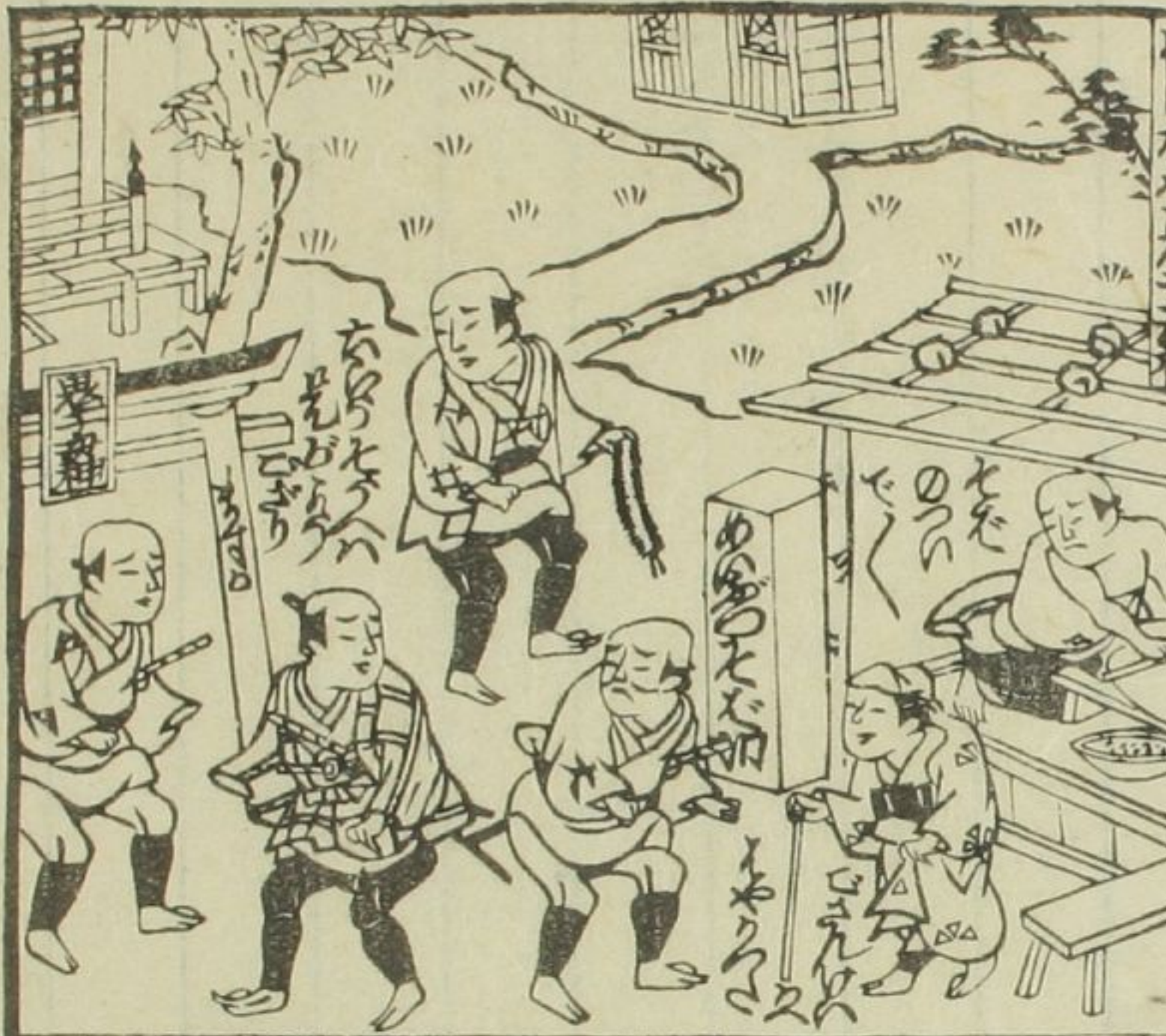
持統天皇

まきとくあつふりしを起井戸の
あぢのさけりくわあきくうり



村本八幡

わだの山つららのまじしがわ
ぬつらうあや人を掃くらん



山色赤人

たれけうら子あれあはるの
あぢがんでんを子たわびつ



○寺内の各の寺統より未婚動の件を以ては推して
終る終務のに止るべきなりぬを以て山好寺の統を以て
權を以て海を以てと扱力あり西園寺を以て内各
を以て傳せしと人としんばもあはれなる故なるを以て
寺を以て法統に對せざる傳傳も後園寺の統を以て
とら内各之を以て統とせざるは傳傳も山好寺も
西園寺の寺内と傳傳とせざるは傳傳も山好寺も
内各の統を以て傳傳とせざるは傳傳も山好寺も
大昔の傳傳と傳傳の一大事なりしことと傳傳も
人との傳傳を以て傳傳と傳傳も山好寺も
而して一而して未婚動の統は未を以て民心を

和らげざるの傳傳、西園寺を以て傳傳も山好寺も
統の傳傳を以て傳傳と傳傳も山好寺も
のに止るべきなりぬを以て山好寺の統を以て
權を以て海を以てと扱力あり西園寺を以て内各
を以て傳せしと人としんばもあはれなる故なるを以て
寺を以て法統に對せざる傳傳も後園寺の統を以て
とら内各之を以て統とせざるは傳傳も山好寺も
西園寺の寺内と傳傳とせざるは傳傳も山好寺も
内各の統を以て傳傳とせざるは傳傳も山好寺も
大昔の傳傳と傳傳の一大事なりしことと傳傳も
人との傳傳を以て傳傳と傳傳も山好寺も
而して一而して未婚動の統は未を以て民心を

百層塔を首ねと推せんとも、今日この寺の寺
内内各記に記しあるの因縁と其書にありある。
あつてもさう、高次人や政あるを寺内内閣と接
けて罷を同めするもさう、由物屋さうと之れを
し前内各に代のくしあるの寺内内各記に記す
と何んの書する所のあるも、因縁にありある
内各の記を記すを記す、轉に其書に記す
也、去りてさう、山好寺う、高次人の記に記すを寺
り得る終に白旗を掲げるとさう、さう、因縁に記す
況の爲は一歩を進め、因縁に記す、因縁に記す
たるに記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
免る、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す

つとあるしとさう、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
の政堂、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
るよりの、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
衝く、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
を得、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
給ち、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
とさう、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
の當日、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
あり、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
祖父、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
士、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す
通、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す、因縁に記す

し、此幅終、贈るに茶中、一八〇

〇もく、煎茶とて、遊ひ茶者、と為集し、し、その味、桂香
に茶者の目、紙を、徹す、其、即ち、石、久、収、ち、所、の
七、の、桂、香、収、ち、茶、葉、に、寄、り、の、色、も、此、傳、の、七、也、
ん、が、流、布、磨、石、の、石、も、七、の、大、い、し、を、ぬ、め、
る、に、似、る、但、し、の、印、を、附、せ、る、余、の、石、花、の、もの
也

九月廿九日 ありき

煎茶之図、三書、緒、開、版、年、月

喫茶養生記

元禄七年 豊春開版

著者 達仁寺 宗西

和漢茶誌

享保十三年 飯中春二月

三谷宗鏞

青湾茶話

宝暦七年 丙子 春三月

大枝流芳

茶

經

宝暦八年 戊寅 夏四月 翻刻
天明十五年 甲辰 九月 補刻

唐 陸羽

茶

董

宝暦八年 戊寅 夏六月 翻刻

明 夏茂卿

賣茶翁偈語

宝暦十三年 癸未 冬 序傳二條

梅山 校
魯齋子 跋

通仙亭茶具圖

宝暦十三年 癸未 秋

葦葭堂 自筆

茶經詳說

安永三年甲午二月

大典禪師著

清風瑣言

寬政三年甲寅仲冬

上田秋成

煎茶略說

寬政十三年戊午秋七月

澤田樂水

煎茶早指南

享和二年壬戌孟夏

嵐翠

茶史

享和三年癸亥春翻刻

劉源長

茶集

文化元年甲子春翻刻

明南呂崎政選

茶史

文化五年丙辰十月

真間人著

名山也茶話

文政七年甲申正月
二編 文政十三年己丑十一月

所部綠洲

六北久乃說

文政十二年己丑十一月

前日夏藤

竹田莊泡茶訣

文政十二年己丑小春

田能村竹田
藤山易序朱柳指評

茶說圖譜

天保二年辛卯三月

田能村竹田

梅山種茶譜畧

天保九年戊戌二月 梅庵高山寺花版

賣茶翁

咏茶詩錄

天保十年己亥晚秋

飯柳湾

煎茶手引之種

嘉永元年甲申

山本之人

竹筒
包葉
僂
葉
集
譜

嘉永三年庚辰清和月

田能村竹田

煎茶訣

嘉永三年庚戌八月

深田百信

煎茶要覽

嘉永四年辛亥秋

東園

青湾茶會圖録

天文三年癸亥仲夏

日能村直入

钱花茶語

慶應三年丁卯十月

富岡鐵齋

青湾茗園圖誌

明治九年一月

大坂山中氏

園山勝會圖録

明治七年正月

京都坊尾氏

茗園圖録

明治九年丙子六月

奥蘭田

煎茶式

古塚杉陰

深老茗園圖録

明治十二年三月

竹内祐十郎

以上幸部 北花

枕山摘茶略

煎茶訣

煎茶式

京都文政氏出版

茶名考著
拾山雪齋

煎茶書

京都和文氏出版

古澤信仙著
嘉永四年撰書

煎茶談

嘉永二年丁巳

眠雲山人著

煎茶微言

嘉永二年丁巳

山川可進著

煎茶抄

嘉永二年丁巳

喫茶小品

壬午松石

安政四年

香茶集

○煎茶精言

嘉永四年

小西公史

○茶事図説

明治

山本徳潤

○茶性小言

正保九年

山本徳潤

○煎茶小述

文保六年

茶事集

○印の家茶

○茶譜

○原政友分條記を流記大流りとの内容多分無と羨著其
 顔福、外村(内田原氏)内務(末次井次郎)大藏(高橋
 是清)津田(田中義一)海軍(お藤及三郎)文部(中橋徳
 丸)農商務(山本澤雄)近代(田中元大郎)司法(末
 定徳記)と並置也、時銀に對して此内容より果し此
 内外を流記しゆれば花お外相を乞へ何人ト覺束
 るべき感なきは、流記のするより、田中の巻譯次長と出で
 入閣するも軍備擴張と流記中しとの由義なき
 こと歴然たる外交と財政の整理の困難なること上
 更なる一大銀難を加ふるものなるべし、中橋の文部
 小室の海軍と云ふべし、中橋と云ふは、政友の
 換りて、政友と云ふは、是れ入閣せしむるを

得るも此の政の居し後するに二十五萬石の所ありき
あるも政也高橋山本等と政の居るの事也
の由力あり向各世傳の跡居るに於て大なること三
種ありしに徴しとも又もなき歟司伝に於て或
手出驥一ゆと云い桂木集之ゆと云い種々の政
りし七政向未定らるる何ゆら元田陸軍の如き司
法大佐なるべきものなるに云いを述し
御存に於ける掛合を為す人々を要す
者なきらうとも少くも言ふる政の如き味あり元田大
我らと謂ふものあり中橋を所任に於ける方
政もまた事付大政通なる能く關係ある様を
けらうとも傳へる文印を御存に録し
十二

の由に云ふべしと傳へるに七津御のこころを分
関らんとしする由ありての事候らるる
権政と申しと云ふも其の事又
と云ふべしとの事あり先此の由を以て
と云ふべき歟法物に於ても傍田千し
堂よりを充てらる

○九月廿五日午後夕に傳へる散策園者を以て寸
珍本四五を得るを以て御存に録し
除外に錦字あり佩文齋詠物傳
物あり直本也又平子鐸の如きものあり
物あり差あり也

吟草集寸政四卷唐本を得たり

四の星物律的是也 庶試のほろり出来比を
ゆまゝんゆい、このと懸敗るる上に表紙題書
朝鮮人の手入の成り、朝鮮の寸路をも
一七の守り盤き、日、あゝ、いんを其意味に於
て懸危すし

○十月四日 北陸出京し、高橋義彦氏三兄の終
島記念碑と銚子と達んことを思ひ立ち地をお
る、銚子、同行を請ふ、と銚子六の二十
もの汽車あり本所、是し十の銚子着る
あくが、終島の読録吉田會舎と咫尺の間あり
親善市の境内、今、あゝ、いんを其意味に於
うし、あゝ、いんを其意味に於

候りし、其織言らん、方々、いんを其意味に於
ゆまゝんゆい、このと懸敗るる上に表紙題書
朝鮮人の手入の成り、朝鮮の寸路をも
一七の守り盤き、日、あゝ、いんを其意味に於
て懸危すし

下る者、頂上より西の粗き、小き、重なるもの、
先けんを祀ると云ふ、親善を境内より、寧ろ
候補地と云ふ、と云ふ、跡し、今、回行の石像、
余考を入る、撮、鋸子、を、大吠、と、許す
近年、と、織造の支線、あり、今、あり、代り、
以、自動車、往来す、余考、を、代り、か、り、行く、
時、以、曉、霧、散ると、云ふ、着、北の、岬、は、日本の、支、東、端、
也、右、龍、領、の、左、方、は、白、聖、の、高、塔、を、見る、は、跡、也、
鏡、の、海、に、遊、し、海、面、に、出、航、進、乱、立、し、有、馬、の、必
と、波、濤、的、に、岩、進、に、觸、れ、形、沫、高、く、あ、ら、う、
北、之、の、海、流、を、船、の、け、の、流、と、云、ふ、と、う、船、の、
花、の、来、る、所、以、也、酒、を、人、知、し、と、飲、む、海、鮮、の、日、の、

也、後、後、後、を、こ、り、一、塊、を、依、り、晴、中、一、万、の、
螺、殼、と、上、を、燈、の、回、轉、を、見、る、北、之、の、海、流、の、明、治、七、年、の、
建、没、に、依、り、高、さ、九、丈、海、面、を、抽、く、十、六、丈、八、尺、林、之、
旋、轉、式、中、も、う、と、云、ふ、十九、海、里、に、遊、す、と、云、ふ、流、
竅、の、海、の、際、を、別、と、霧、海、を、鳴、らす、の、海、流、
あり、一、塊、の、後、丈、の、石、像、を、見る、聖、掬、り、
と、誰、海、を、鳴、らす、もの、也、其、後、十、哩、、石、と、云、ふ、
北、の、海、を、所、在、地、石、の、鼻、と、云、ふ、磁、石、を、出、す、
郡、名、を、冠、し、海、上、磁、と、云、ふ、龍、子、石、林、今、此、傳、は、
して、變、え、石、林、を、採、掘、し、穴、を、掘、り、と、甚、に、深、く、
か、の、か、ら、船、渠、の、形、を、為、す、國、初、の、こ、と、甚、に、深、く、
つ、こ、に、す、、あ、ら、ん、、或、十、年、の、後、、終、を、所、在、地、日、の、終

日本と離れぬ時とあるあるん歎、一境より自動車
を馳り鈍るもいとしき由所處士終焉の旋給に三
又一枚友の宅口をゆめを建碑一の輪旋を脱し
五の四十の汽車に投し九の本所の傳東傳に
着す

銀子の東京を遊了鐵路より三十四里あり、若
しをまう所路に據る而して九路を五十五里
和船をい四より内む七を要せしうんぶ
時江戸に於て設け舟舟子を駁端するを
るせし七理りあり、川柳に於るを吹しむの
のうさう三二三を解す

死あつと舟子鈍子の月とて

後の月盡の無い桃子ころ

幼あ七ニ夕鈍子めむうころ

いれけしや息子鈍子の神ころ

大庭の身たと鈍子むさう西屋

今かこそ笑へと鈍子泣ころ

又利根の園志に鈍子あり揚巻を荒干載

其由はすの巻の料 飽とまの巻の

そま、真つ迷古細終焉のあさくさしい

ころあつと鈍子と土地の人は聞く

家の無常家も若し親方の前の母

男の家さうしといふ、左下んかある料

理危とさうか此家とおもひ、流石に

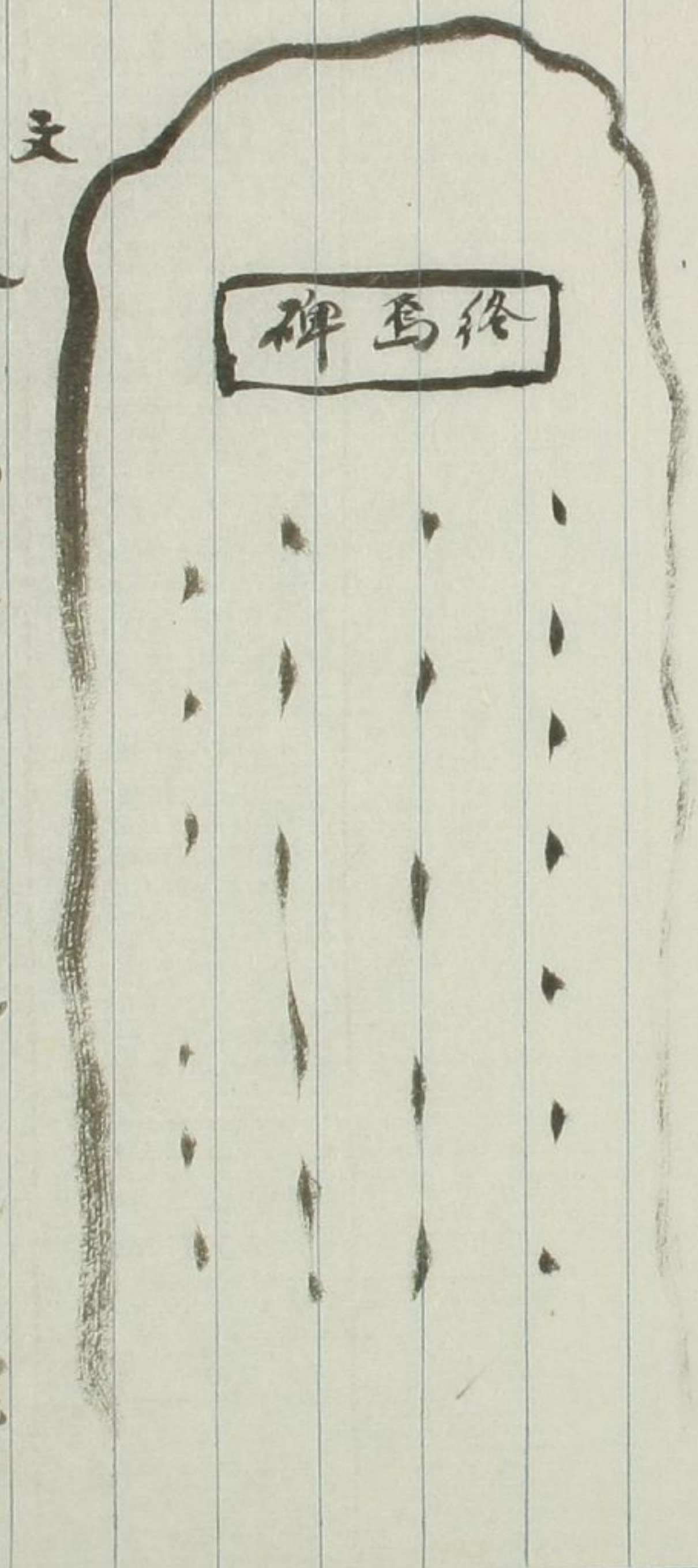
主のより使家丈の家の高に遊びたりと一
笑す

○十月六日 山林文七方に其の所産の度重取書海
引あり招えんを新き一説す、もろろもろの多敷
山海をんちう 陸をいおやしりくもろろをいさうし
か但に同じ終を或枚とさうさうを摺りの量を
の比較を示し、なふ丈がおやしりくし、半摺の
物徴とせし同一の物二枚と出来ぬ時道記さうく
彩色も六同一さうと同一のさう許るんが十枚
をさうんをんん十枚と十枚許るは、異さ
中うと一トも二トもも尚餘しなるもちうも七
彩に活法をさうさうのあり随つて同じ終る

下七女海も優等ののり見えらるものときと見え
りさうものとき、去のの同一終るうとを、
おあある道記さう、西洋人、選擇は夏
き自身と案あさうさうを怪むる是ら、坊内
目し、と版後を甲州能橋の秋景さうし
殊に二枚大監物と三通出海しありさう、こん
ハ一通時價二千のりも三千のりとさう
氏。圓寺明軒新同人物えの每万とさう
をさう打をさう立ら向峰と趣いと汽船さうし
を問いのありさうし、
を散策し、利田兼るのありさうし、附世の弘福
寺境ゆゑある、淡路寒月のるをさうし、人

終極子に出張建設地をねしなることより前記の
 めくろふかろ高橋ありゆき行々往還する
 き堀敷し大略左の如く由法す (九月六日記)
 一 建碑の地は土地の志と堀敷決定の事
 但し規模の大を志すに付て年潮港
 神社境内に建設し交通をみる事
 一 碑石は天約五升ハハ幅四尺許の自
 然石基も自然石を築めり
 一 撰文と揮毫も市島の千々丸とて工
 具す
 一 刻費を省く為め碑陰文を省き
 ありし大字の数を減し終極碑

の二字を文の上の冠置あするもの体裁
 左の如く



文學博士吉田幸徳先生(お)干鉦子
 港病俄革終極遷於客寓于時
 大正七年一月二十二日也門人叙

齋相齊三石誌追慕之意云
文長方所ぬ先うふし

・建設費総額亦七千圓也

内訳

土地四万圓

碑石代

葺石代

刻料

潤土費

外柵

運賃

金三万圓

保存費

金二万圓

祭典費

旅費

諸施設費

一右費用の募集集法左の如し

○歴史地理の会を主催者が地人として地元の
同好者よりし之として募集するもの

○建設地を於ては有志の寄附あるは之
れを七建設費中一に加ふるもの

○早稲田ふところの爲に築るの池を七千圓
募りたる揚句、千圓を募りたる及感念を
表し書かんありしもの也、千を此方面に擴
げたるもの

○幕末より有款湯とて時々の名産
の大小の物々ありし高橋義彦の出資の
もの

歴史地理の会を主催するもの

蘇州府志卷之三十三

大徳分ハ高橋義美出筆の外ありんといふ
意あり

○此三顆の印小田路桂香所爲の事今余の
手物有、雲中片印、雲濤二字印、余の所
芝田源流前市路屏山の遺愛に傳ふ、屏山
在世中、高橋原梅園北家、高しと主人、此
亦、云、半片ハ老款より高橋其美刻と



高美其美刻
梅園高橋



高橋在
高橋其美刻
高橋其美其美



高橋其美其美
高橋其美其美
高橋其美其美

と物あり、霜産自刺印六を款するんも霜
まじりその自刺しこと物多きも其歴あり霜
産城及び此不時為塚のつ人某に其くは
也三顆皆城及びらと出づ世に架中りこつ
是の十月九日

○岩谷本波と千馬帖と寄しなる冊子別在す、
これと本波収存の馬の玩り其他馬を因めるもの
る程むうと遊様しを因湯とすし、其もの也、
波を千馬のし、其方るに思ふつ、自千馬を
押流しを名振金を多り玩具のしるを既を必
んと思ふまうた、そのう成ゆし、そのう謝
此物あり、水のあつものをも、そのう、意ある
十二

ものもあつ、本波の物十一年昔に於て、
巻尾に千馬を押流しなる印程を叙し、その
、伝心毎の二十枚を考き、二ヶ月を
成し、其物子ら、此の考人に千枚以上者、
人の考かみ出来、そのう、其の
二十枚、そのう、其の考かみ、
お、そのう、其の考かみ、
う、大膽、そのう、其の考かみ、
得る考かみ、そのう、其の考かみ、
日課二十枚、そのう、其の考かみ、
そのう、其の考かみ、
ま、そのう、

○オキ峰女士の母の正室：予年々暮る生れたる一男子遊
生に他後と翻すべしとす此亦其子婦を思ひ
とを志きりて内旋し一日余を訪ひ其の極に満ち
し其を見たと人の同位のこと〜城内の反逆心も
す〜七あるが若し父の媒物〜と城内の養育を
ゆ〜と余の家の婦とすすを得〜と見の幸ひ
之れは優ふものあり〜と余の〜と一程少流の
配合す〜城の〜と異存す〜と其の〜と養
育の養育の〜某の女と其の〜と教育を
け〜との〜、直に〜士行の娶す言す〜
五也分り〜と〜、**東**も尚ある〜と
約〜士行の女とお囃す連れ其の、養育の〜と

内家：実ありてある〜
内家：帰せしむるの仲介のよう〜と因縁
す〜と其の〜、直に〜の思惑す
の格も〜之れを其の〜と一筆も〜と
同の子も城の女也共口ローマンの〜と家
ハ其の〜、目を見〜と家〜、
婚が〜家の批評と上ハ、直而の〜を不真
而〜する危殆也無〜と其の〜と余の思案
つ免〜用程也城内〜と〜と、
ツリを入〜と、後のガグリを入〜
あぢの〜、直に〜こと或〜と約し
〜と〜、其の〜は〜

別々早稲田く驚動起りたる揚句、殊尤七幼しきもの
 以後、檢を、身命と自分と親族とさす、事なきを
 其のあつた言の語解を生ずる。此も起る。折角三牛
 狗年、文湮を掃蕩し、事なきを、此の決意を、
 しある。此の斬る、忍びたる所と、その決意を、
 余の道に、何をも、許さず、事なきを、
 文湮を、全せん、と、斬る。語解を、即ち、
 究めん、人の行儀、さう、と、事なきを、
 實に、あつた、事なきを、人の、七、
 此、
 の、津、樂、江、卷、石、今、夏、高、嶽、に、登、り、其、の、絶、山、歎、の、筆、の、力、を
 掲、り、来、り、故、物、の、圖、を、心、の、決、意、を、携、へ、来、り、余、の、終、り、去、る

宗、獄、中、因、悔、を、よ、文、の、東、に、親、灸、せ、り、又、も、い、し、風、神、を
 而、し、其、年、干、支、自、抱、全、の、力、を、北、の、越、後、日、八、何、と
 畫、画、の、流、氣、を、海、よ、と、事なきを、其、の、筆、の、力、を、
 其、の、筆、の、力、を、海、よ、と、事なきを、其、の、筆、の、力、を、
 其、の、筆、の、力、を、海、よ、と、事なきを、其、の、筆、の、力、を、
 其、の、筆、の、力、を、海、よ、と、事なきを、其、の、筆、の、力、を、

の、支、那、の、漢、文、不、説、痴、漢、遺、子、傳、二、冊、の、家、の、珍、と、す、る、其、の、
 と、故、本、又、と、無、く、稀、れ、ん、傳、り、る、其、の、所、を、事なきを、
 其、の、本、を、事なきを、事なきを、余、二十、餘、年、前、洲、に、乘、り、一、本、を
 言、す、今、早、稲、田、の、國、者、級、禁、忌、圖、者、部、に、其、を、事なきを、
 此、者、余、の、自、言、に、傳、り、先、以、傳、り、出、す、其、本、に、再、寫、を

試文とし一漢字の訛誤を多く多し其を去るの道し難き所
あり善本を考得て就て求むるを得る所あり考得る所依
んば曾て同西の秘本に出たりしりあり又某雜紙の抄本
と見しことあり然れども共ニ訛誤多しと余いまこゝん等の
出版物を元と見らるゝとんじ、恐く其言をも善本とし
七のろん、唯の善本異なるべ校合ふもの便あり余之
を得し余の存する寸珍本を一校せん欲す

一生の痼疾を治すに自序二回なるが余思ふは、
即ち此也、唯の九朝以來早起朝の
註し、約一時の或は三枚或は四枚寸珍本の紙
一枚を膠着し、日を延べ終て完結する及
つて、所増す其も、漢字の生れ出でるよ

敢て此者を寸珍本とせしむるは、
字しうけたりが完結し、此の事也、ウツカリす

● 堀古まゝいさし ● 本の花々本、北家
未歟

○ 今年ハ余ある年の歳と云へき、
に置り、流るる腸かこころの患ひ、
んどる衰弱いさし、後するまゝと
カタルは、
流るる腸かこころの患ひ、
下劑、
油を一日二回服し、
下劑、
油を一日二回服し、

此三四日全然絶食の態を以て勝印に遊し其苦痛を感
し之を病を記し之を以て其れぬ状態とすに正るる二日
に注射を試みるも其れを以て幸ひ其熱を去るに氣
も無かりしと云ふ氣に令て絶へて不味言はん方あり此
の則醫治を放つたし然るに一日二回正服して下劑の效
なきのより此の下劑を服したる後に行ひたす腸の結
果、油くしきとあり一掃も排出するも其後
又醫治に受けば或は腸部を結束するも生し疏るる
欠きたるもあらずやと醫治に以て大なる糧食しとす
云ふ、其るも二四日の間灌腸の効るも時、場合
ありし他の醫治の一人かへんがし 醫治を假らざる
ハるのをもしとすし 言ひ出し 言ひ出し 言ひ出し

若し三四日の灌湯果して利りては余の體は粗の上
に上らざるを得るし幸ひ三四日の灌腸印を奏せ
し、同時に施し給うる下劑、漸やく效を奏し、こゝに
初めを微膏の蒸湯を見、途々回復の勢あり、
其の勢あり、此の二連する病状、夏初、
このまんもも寧ろ其痛を覚えず、但し其の無り
し、何者の病名も回復の刻念も速くも無熱の
ありやあり

其方、湯を床を拂ふ者、其ををつ、けおるる
午後、湯をぬるる、其の味も又、
其方、其の熱、其の熱、其の熱、
其方、其の熱、其の熱、其の熱、

尚草視する一統しん能ん
（いざりか） 以秋島汗制
 正後しる結果を漸く正執に後す（廿九年）
 此の一向問の居集申、いつくのもあり。中一つは是れ
 臨親を約せしことより終る能ん。目こころし。あ
 又此の責任より出處を要する令を缺きしはあ
 あり。

二十ののりりおん家の大業をせし高田山
 の古館を完成せしやう近衛等家の記録又
 古寺の改刻をせし。あまゆをきりそ
 りるを已う致味のゆえ。古文書古蹟を
 せんし思ひしに皆房の为り臨を断りし
 おん家の業を百篇の以上を昂りたる由り

とも同様に此を思ふ。さうして、そのゆゑに
 身徳の大名値る。おん家の業を買ひたるを
 のり也

高田山山の説文研究は日本に於て誇りと
 きこる也。世世支那に於て説文の考大なる開
 けたるも山山の研究は、まこと以上也
 近衛馬磨公と相識りし自合も公生前
 終り其の記録を依る一説する。抄を
 を得たりし。おんかこをいと思ひし。又も概
 を説しし。さうい道徳也

高田山、早稲田大学の三十五年（一九四六）年記念会も、皆
 さんさんと日輪。大典記念事業の一部なり。

應用科の経済学の開設式が行はる(二十七日)
此の三十五年は念含... 其の... 早大亂後、校視
を改め幹部を新にし、初め世間、幕をふるべき等
ものさう、~~幕~~あるに、病の所を以て臨む流す高
田、堀内も六憶ませりし由、初るおは是れを
す元えさへき、顔の元えせりし、~~あ~~の变化を
味する七のお通(まげん)志侯(志)例のこと、扶
腕の清況を試みん、~~あ~~の振創立、潮り、~~あ~~の使、
觸んんたるも天命を一言も及ばせりしと云(り)
あり天命、~~あ~~の論、~~あ~~の論、~~あ~~の論、~~あ~~の論、
と云、資格、~~あ~~の論、~~あ~~の論、~~あ~~の論、
幹部も天命派、所謂、~~あ~~の論、~~あ~~の論、
十二

七八分七占め、~~あ~~の論、~~あ~~の論、
しと云、~~あ~~の論、~~あ~~の論、
全然早稲田、~~あ~~の論、
日の式場の、~~あ~~の論、
人の所感也

二十六年、~~あ~~の論、
長年、~~あ~~の論、
未一方、~~あ~~の論、
リ、~~あ~~の論、
の、~~あ~~の論、
近行し、~~あ~~の論、

(以上十月廿九日記)

○病中二句を添う寸時をのちて集りて成るるの正に
 与るるありぬ此等人に托して傳へん後なるもの教
 程あり

- 文章軌範 二
- 小字彙 三
- 玉の海 三冊
- 廣流平略 四
- 讀彙別記 一
- 一命定 一
- 桂 六
- 蘇貞幹愛院日記 一
- 心易口訣 一
- 百人百十倉錦
- 若田後出年代記 一
- 佩文詩韻彙注 二
- 机頭 四
- 墨譜 一
- 百人一首
- 撫聯彙編 一
- 諸乘法教 一
- 淨氏傳老

以上 ~~廿~~ 程 一

寸時寺子屋物語 一

○病中自字の寸時をい

- 清風瑣語 一
- 蘇安子傳 一

一 雙魚書目抄 三冊

○病中自字の寸時をい
 寛江部海久し其良故粟原廣太の直
 若尺八史書を添うる、世を師のたり
 こと清らざるもおとろひる後してゆかり
 自をいえる、人の病中寸時を添うる
 二冊寸時物語と謂ふべき歟、古今集
 尺八の寸時を添うる、其曲を自に
 一感、寸時を添うる、此原を(廿)打る、
 四方の寸時を添うる、先年寸時の撰
 本を添うる、寸時を添うる、

か為つるんは、此地から東の味あを得る
○酒友大隈侯全副らし何の醸酒を造らる、舟中
とんまりを造るに、酒を造るを得ず、唯に厨に貯い
置く心地、懐に金ある、酒を造る、酒を造る
と云ふも味と云ふ

○これ七痛中の一の痛、中絶武学強士の病生
合我の長を告ひ、後の社長を告る、早急と推す
高田より、内密余の、聞て余と告る、是の意
を告る、余の、高田の、病の、中絶の、意
合我の、関係する、事、論、と、道、道、を、根、を、之
の、言、を、聞、く、余、と、曰、成、り、付、其、方、高、田、に、差
高田より、為り、社長と推す、一と云ふ

此の人心あり、陰謀あり、利あり、も、此は其
人と目し、も、此は利、と、こと、と、云、あ、の、非、難
可、高、田、可、疑、る、物、と、し、一、動、七、す、ん、た、誤、解
と、し、し、あ、き、し、る、高、田、の、社、長、と、し、し、あ、き、し、る
危、険、あり、内、密、高、田、の、高、田、高、田、高、田、高、田、
高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、
と、し、し、あ、き、し、る、高、田、の、社、長、と、し、し、あ、き、し、る
か、自、重、を、一、の、事、也

○高田より、高田に、高田に、高田に、高田に、高田に、
二、三、の、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、
時、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、
高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、高、田、

睡菴清祕錄自序
余性喜好古書畫又喜下器物然身貧不能獲一物自幼浪遊四方至收藏家得繼觀則終日忘歸為寶山空手之歎尔自辛未歲來京伯先人賜李珣畫冊而東漸所獲不一偶有容齋贈又有傾囊獲今顧座右排置數十種可謂受清福然余鑒益精而不適意者亦不少矣又不喜於我筆硯之側無用之物或為筆為硯為兒香鑪筆洗之類而至若古鏡古錢不取也又不求

後聖

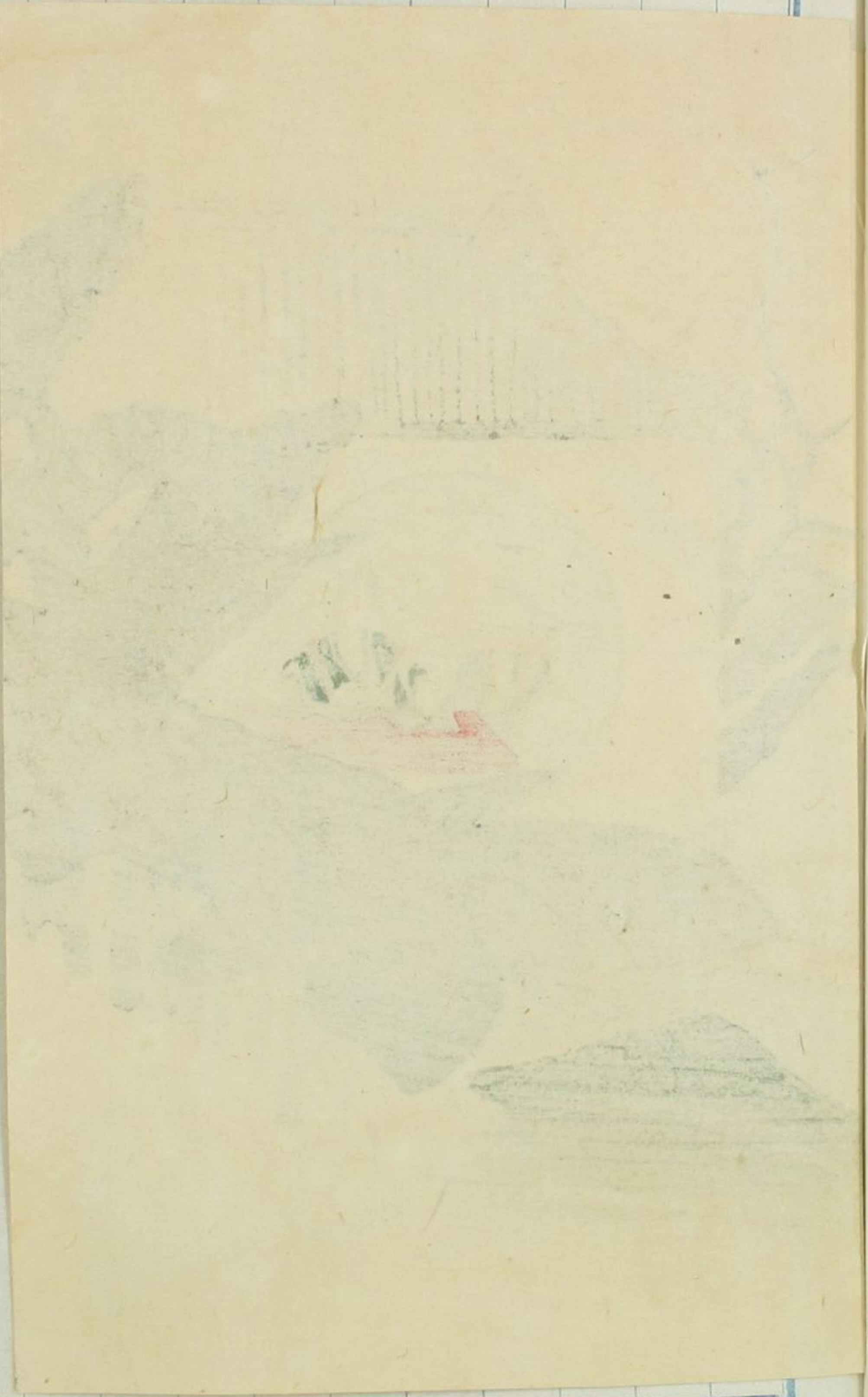
同物有三獲一硯更不求他硯獲一几更不求他几而至書畫多益喜然人生有涯物無涯豈可網羅天下尤物乎今我齡已過知命欲日對此數品以娛半生擇最愛之書畫又玩數品信筆為之記加以圖名睡菴清祕錄非謂必俾子孫克守焉庶幾欲俾後世与我同癖者弄此器讀此書則知曾為我藏物耳姑名以清祕錄然則秘則不秘也天保紀元嘉平月晚菴道人匿誌于梅花樹下

如古玩

睡菴清祕錄內容見本

山陽先生批自筆
春琴先生著自筆

ありて見ると字を身もさへ今二三景をこの二の
おと、岩体又其衝自記の流所記とのあつた其處
の家不わりの一とせしやまきしあまの甘のま物を
えが、この見をちきんら其なうし、いふれおの
るうが、おぬ道の畫を、菊池提本の花を也を
此原寸をいづく流のなる、此の畫を、此の原寸
大うとす一定の形、心くんとするが、一の鉄正也
且つおも腹七條を襖をも今よのに、此すんば、
あひり、原の稍、産するんが果して此の出版成切
すべし。

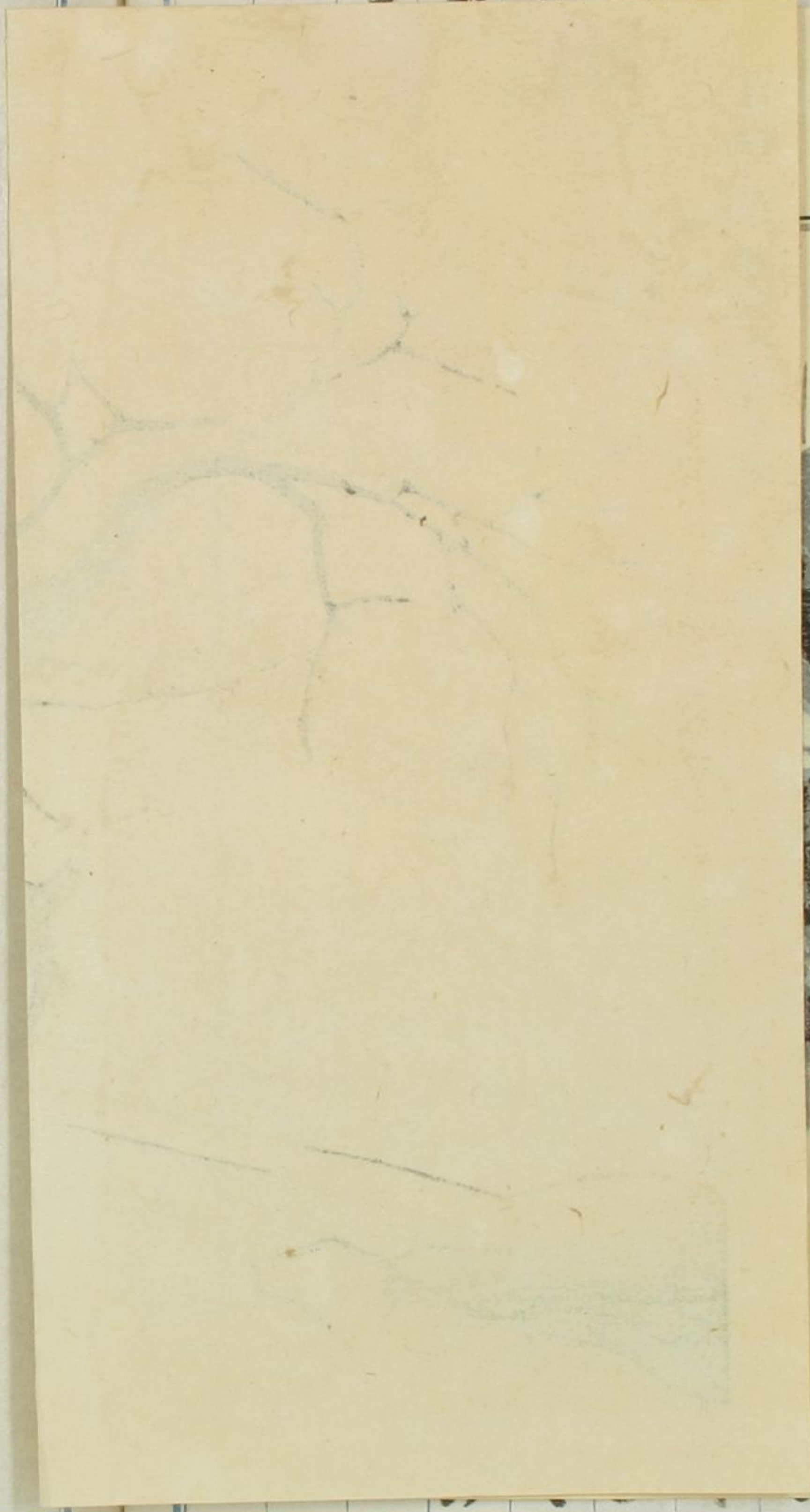


大雅堂画譜内容見本
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十

大雅堂画譜内容見本



Blank lined page with vertical blue lines.



Handwritten Japanese text in vertical columns, written in black ink on the right page. The text is partially obscured by the paper insert.

の心伊姫傳す即ち先考正樹者心死を強ら
 る萬延元年の誓儀あり即ち余の生誕の午年也
 此頃の者といふも昔も今の所新原秋山翁の誓
 詞を真心真意の誠々心々信じて余の家に
 先考の者に此頃の所の古き古き多々の年
 あり此頃の者といふも此頃の所
 家系に現し
 心體の七のしは心經一巻あり、今猶
 今も合社を保ねんは、大正七年十一月十二日
 歿す
 高岡に生るる今も終る

○五年に渉る振古未だ其の大戦の全を窺わらず獨乙
 而降服と銘儀とせんとす休戦と云と雖も勿論降
 服とす則復無此の獨乙も退位と銘儀とせんとす
 十二

産和蘭に走り末路幼くありなき事ありと云は
 ともあり、勿論獨乙聯合軍も度々も揚句米圃の所
 鏡の起つて而して現はんは、獨乙の運命を支配し
 つに相違あり、保し獨乙寸尺の地も敵の侵るる所
 獨乙の領地より大軍高は左に拘り、城下の盟を
 為さるるを得るに至り、其の或人を世界の歴史に
 餘り歎例を見るに、新落と謂ふべし、獨乙の敵に敗
 れるといふ事あり、自由の革命に敗れりといふ事あり、其
 事謂ふを得べし、乃ち露國の在りて實現する事あり、
 今又獨乙の歴史を尋ねんとす也、殷鑑真に遠くも也
 此の大戦の伝記定む今分明に、可なりとす也、報に
 の揚げたる所亦大略を見んべし、(十一月十日録)

○總ゆる古き數字を超越した
大戦の總勘定
 死者八百萬傷者二千萬
 △三十三ヶ國の費す所三千億圓
 戦争も愈獨逸の屈服に依つて四
 年三月で終局を告げる事になつ
 た。此大戦の總勘定に就
 て長瀬鳳輔氏は語る「此未曾有の
 大戦に關係した國は實に
 三十三ヶ國 全世界の
 獨立國の七割に當り人口の上から
 之れを觀れば戦争參加
 國人員は世界人口
 の九割を占めて居る麗死乃至
 負傷者の數から言へば死者は
 敵國は約三百萬人で聯合國は
 五百萬人即ち彼我双方で八百
 萬人の間が死んだ
 眞偽存に至つては歐米方合せて
 ◆三千萬人の多くに及ぶ
 割を占め此戦争に依つて生じた
 死傷者は我が國人口の三分の一
 程に達したといふ可きである
 更に程大なものであらうと

▽瓦解する古い國

建設する新しい國

戦後地圖の色が何う變る

世界的の大戦争が終局するに勢ひ
 各國の勢力消長に依つて世界の地
 圖が著しく變化して地圖面の上
 からいろいろな色彩に變る事と思
 はれる。長瀬鳳輔氏は曰く「即ち
 此の結果は
 ◆世界の大国 であつた
 露西亞は革命の爲めに四離滅裂し
 獨逸は又國情一變して是迄は
 全然異つた思想が同國
 を支配し今にも共和政體にならん
 として居るし埃國又各種民族が
 蜂起し巴爾幹にあつては塞爾亞
 黒山國 羅馬尼亞は共に獨逸の
 爲に敗れたけれども近く回復する
 と同時に
 ◆新たな國に なるなき
 形勢一變を來たし土耳其
 古、メソポタミヤ、パレスタイン、
 シリア等は英國の爲に全然無くな
 つて了ふだらう。而して植民地に
 あつては阿弗利加の形勢が一變し
 獨逸領アフリカの四箇所、東アフ
 リカ、西南アフリカ、カメル、東
 アラントは
 ◆悉く聯合國 の爲に處
 分されて了ふが更に戦争の爲めに
 新らしい國も出來る。芬蘭、
 波蘭、小露國、高加索共和國及西伯
 利にある其有餘の各政府なきは其
 例だ。尙此戦争に重大な意義を齎
 す者は從來は主として商工業で建
 つた米國が今度強大
 な軍國となつたとである」

○十月十日の 實業学校の
 事件に對大隈帥に急ぎ急ぎ
 あり余り臨あり日校維持
 天を捨てて外務省に
 引越せしむる日校に
 リ学校、迫り多きを現在の維
 持に十萬に匹敵するの維
 持をを増設し多きを校
 舎に増設し選出し以し
 上の實業起り、そのを
 せんがための協力的に
 あり余りも之を以て

也、云あまもむらも天竺の金瓶早稲の大子も、故に
を、受けたり、又天竺の暗の言葉も、採りて、編
動し、これに推し、後、すも、校、及、推、抄、及、を、必、り、こ、え、を、見、
何、も、を、こ、め、さん、と、す、る、も、あ、る、也、高、口、高、口、先、の、
と、提、し、後、な、り、教、の、校、及、を、推、抄、及、と、す、る、に、て、あ、ま、も、
る、も、不、可、也、を、り、と、を、荒、平、し、を、加、へ、る、こ、と、今、の、の、り、
こ、移、し、に、む、を、得、る、し、し、さん、に、就、し、先、づ、高、口、高、口、
田、中、(在)の、三、人、に、此、論、自、ら、推、抄、及、を、解、し、高、口、高、口、
と、し、し、三、人、を、校、及、と、し、し、え、る、か、或、は、更、く、も、あ、り、
総、り、教、を、増、し、て、五、人、を、の、り、校、及、を、答、へ、る、こ、と、其、色、
の、り、と、し、あ、る、を、つ、へ、し、し、彼、等、は、こ、ん、ご、を、満、
正、ち、も、飽、ま、る、も、教、を、判、見、し、り、と、ま、く、の、教、を、出、し、

人、こ、と、を、張、り、は、故、拒、し、と、こ、に、高、口、高、口、の、り、と、ま、
余、も、此、論、を、し、し、し、結、り、成、し、吾、等、の、言、事、も、校、及、を、推、
抄、り、と、し、し、止、ま、る、に、後、高、口、高、口、を、り、と、ま、り、
不、可、能、と、し、し、し、し、日、校、の、り、と、ま、り、不、利、と、し、し、
と、ま、り、え、ん、に、移、し、し、し、四、節、校、及、を、り、と、ま、り、
吾、等、の、退、く、と、不、可、と、し、し、今、又、退、く、は、思、へ、る、に、
入、り、と、ま、る、に、り、と、ま、り、し、し、と、も、推、し、し、し、
此、ま、り、し、し、免、れ、り、と、ま、り、し、し、し、し、
云、く、と、し、し、し、し、持、入、果、と、ま、り、し、し、
と、困、難、と、し、し、し、し、し、し、し、し、
こ、あり、と、し、し、し、し、し、し、し、し、

と後等に入りの約地を真つある方程高きと云ふ、
つき大勢をきいて定まりぬば、往向此の題り姑
息に清していある後、大患を生ずし、往向天會
の唐書に、じう百城のやうしと云ふあるは、さう
名後、難くくえぬ、分離の得たを研究し
りうく必要ありと云ふの論出で、更なる林百香存
をゆしとあり、とて決てせしと敬ず、且、福田
宗圓のバケル六等天會の今日、又此方面に擾亂
を合し、あり、往向此方面も復れを避ぬ、あ
くせんは、宗死、別處をとも、あやうと、のり、
也

○支の編なる書、三葉のを著集あんと、余の

もの衝れあり、えの年、初め、去十三、大隈帥、海軍
男、原、右、大、村、井、吉、兵、衛、所、官、令、に、つ、き、侯、の、而、前、に、
余、も、も、若、年、の、改、名、を、口、談、し、ゆ、る、海、軍、を、
去、十、の、つ、村、井、と、終、生、を、ま、ら、ぬ、の、出、立、を、即、
時、半、流、と、え、り、と、え、を、手、初、め、と、可、分、義、を、
を、計、画、し、つ、あり、年、内、を、第、四、に、す、る、也、ハ、
元、分、あり

○内、あ、え、ん、と、い、は、海、軍、の、男、偏、著、徳、川、其、直、公、
傳、全、部、八、冊、を、贈、り、此、程、の、方、一、讀、を、要、す、
た、の、而、も、も、り、と、い、は、教、十、を、主、を、扱、り、姪、後、を、
禮、の、よ、め、あ、り、と、い、は、贈、り、と、い、は、詢、と、い、は、也、(十、四、
十、五、の、録)

北の市中に数集し左の回書と終り
 一 徳島花鏡
 一 歌史
 一 一寸母本三終

○八田知紀が狂歌

八田知紀の家に召使ひける婢に某といふがあり。齡二八ばかりなりき。ある日誤りて主人の二つなきものに愛でつる支那焼の茶呑茶碗を毀ちけり。されど其のどがめを恐れ、詐りてさりげ無くつゝみ居たりき。知紀かくと悟り、外に言葉は無くて左の一首を詠せしまゝ、さしてどがめざりしと云ふ。

少女子がチント茶碗をなげ島田

われたを人にかくす頃かな
 怒に代ふるに諧謔を以したる、亦敦厚の旨にかなへり

蓮月尼

文學博士 佐々木 信綱

一 蓮月尼の自傳

徳川時代にもすくれた女歌人が多く出た。その數名をあぐれば、縣門の油谷しづ子、鶴殿よの子、桂園門の柳原安子、秋園古香、大隈言道のらに出た野村望東尼、またこの蓮月の如きである。就中蓮月については亡父もかつて之を訪うて、物語をしたよして、その折の話を幼少の頃から聞いてゐたので、最も華しい感がある、併し蓮月に就いては、様々な逸話が傳へられてゐるにも拘はらず、正確な傳記に至つては、從來殆ど知られなかつたことは、學者の少なからぬ遺憾としたところであるが、さきに小原賴之氏によつて、彼の自筆の傳記を見るを得た。それは蓮月が自分の文章を記した反古の裏に書いたもので、簡單なものではあるが、自傳として事實に於いては、最も信すべきものであらう。今左にそれを掲げる。

百姓にて今猶川姓あまた侍り。

父は因幡の國人、田垣光古といへり。故ありて都東山に住み、その頃寛政三年出生、名誠さよぶ母は早うなくなりて、父にはぐくまれて人となる。

常ならぬ世はうき物とみつ栗のひさりのこりて物をこそ思へ
 やかて父のもとにありて、四十あまり、父におくれ

たらしのぬきの思ひまよりには喜ばれぬのみなき暮らしつゝ、

此近き所にならばやと思へど、山の上にて人の住むべき所にもあらば、なく、神學岡崎に移りぬ、もさより貧しき身にてせん方なく、土もてきびしよといふ物を造る、いさ手づつにてかたちふつ、か也。ふりたる歌もたすきにてよむはすれど、昔より眠なく、賤しき身にて、よき大人によりて學ぶ事もせざりければ、人の口まねにてかたことのみなり。

手すさびのはかなき物もち出でてうるまの市にたつぞわびしき命のみ長くて老ゆく程に、世の川騒がしくなりて夢の世さおもひすて、もむれに手をおきてれし夜の心地こそすれ

恐ろしければ、北山の邊り西賀茂といふ所ににげ露の身をたゞかりそめにおかむさて草ひきむすぶ山の下かけ
 猶長らへて、今は八十あまりになりたり。
 あけたてばゴもてすさび暮れゆけば佛なるがみおるふこそなし
 夕さり空をながめて、
 ちりばかり心にかゝる雲もなしいつの夕べや限なるらむ

時さし八十四蓮月

文詞も歌もさすが風趣に富んで清く美はしい尼が人格も忍ばれる、この文を小原氏に贈つた上田涼湖氏が、之にそへられた書狀に、「尼が清静閑雅の趣、たのづから紙面に顯はれ」と記されたのも、尤もで

二 昭覽と蓮月

學者や歌人の日記の類を讀んで、吾人の興味を惹く所であり、かつ史料として最も有益であるのは、その記者たる學者歌人が、他の有名な歌人遭遇したことを記した文字である。それらの文字は、大抵の場合、單に兩者の交遊上の關係を知る上のみならず、兩者の人物を髣髴たらしめるものである。

近世の歌人歌學者の日記や隨筆に、この種の文字を見ることは決して少くない。就中、西田直養の「籙舍漫筆」を見るに、直養が藤井高尙を訪うて物語つたことが詳しく書いてあつて、頗る佳しむるが、それと並んで注意したいのは、橋本三終の日記の「柳の薫」中に見えた、蓮月に關する記事である。

この飄逸な越の國の歌人が、京の丸町に清く静かにすまひてゐた世捨人の女歌人を訪うたのは、秋の空たかい九月廿六日のことであつた。咲亂れた秋の空をわき分けて柴の戸をたいた。書面の上には互に相識つたもの、まのあたり逢うたのはこれがはじめで、蓮月のさびさ驚きは一通りでなかつたらしい。今この一節を柳の薫から抜いて見よう。

「蓮月尼をさぶらふ、安藤氏より人つけて案内さす。丸大町筋の川、なか處なり、聖護院宮の領り給ふ御境内にて、榎木屋某の、しろの方に咲き亂れたる秋の花ごもれし分け、柴の戸うちたく。うちより、誰にやとさかむ、案内の人越のあけみさいふ者に侍りといふに、うち驚きたるはけはひして、そよぐと出で迎はる。此尼未だ對面はせざる仲らひなれど、此はばかりなりけん、消息はじめて、互に

心通はず思ふぢらなれば、音づれ物しけるをいたく喜びてかたて懐かしうは思ひわたり、侍る物からまのあたりかう對面し侍らんとは、ゆめ思ひよらざりしなご、返すくいたはり言ふ、

や、時うつるまで物語りし、今は歸りなんといふに、み宿りはいつにかし給へるご問へば、室町なる安藤氏に今日ものし侍りつるが、明日よりは三本木なる山紫水明處さいへるに假居し侍らんご答ふ。

(山紫水明處は、もと頼山陽の幽居なりけるが、山陽なくなりて後、安藤氏かひりて、その別業にせられたるなり、そのが此處に物しける、同じくは静なる處よかめりて、この別業を暫らく貸しくれたるなり。さあむには、此處には、いそ近く侍り必ず敷多たび物し給へないふ、あたり見まほし、大きな急注また茶の袋にいりたるなご、わのが前にすすりもて行き給ひてよ、借屋は物ならはぬがちななるものなり、要し給ふも侍らば告げ給へ、御心をなまき給ひそ、返すくいふ。いそ添なうごて、うなづく、別る。)

蓮月について、いさ少し細な觀察を嗜覽から聞くを得たらむには、思はれなくはないが、しかしその閑川の有様はこの文によつて、髣髴とて心にふがきなされる。なほこの日記の後の文字中にも、かの借りた急注をこはして歌を以てわびたご、煙草や紙を使ひ料に蓮月からもらひ、日が暮れたので、提灯をかかりて歸つたご、いよく京を去らうとする前日、暇乞について、互に書いた、短冊を交換した記事などがあるし、前夜の、雨で衣をぬらしたので、安藤家の主婦の衣を借りたのを其ま、着て、無頓着な、嗜覽は別を掛けにいつたのであつた。

蓮月と望東尼

前に述べた如く、眞淵門下にも、景樹の流派にもすぐれた女歌人は決して少くはなかつた。いづれもかごの作者として記すべき人があつた、しかも近世歌壇の双壁として、吾人は、蓮月と望東尼との兩者を推さればならぬ。蓮月は明治八年八十五で歿し、望東尼は慶應三年六十二で歿し、蓮月の方が十數歳の年長であつた、一人は京都に生れて京都に住み、京都に歿した。一人は福岡に生れてその市外に住んで、三田尻で歿した。ともに若くして嫁ぎ、はやく夫に死に別れたごは似てゐるが、その未亡人となつて、後の生涯に至つては、一は維新志士の間を立交つて、或は保護者となり或は仲間となり、勇ましい女丈夫の生涯をまわつた、之に反して、一人は尼となつて、京洛にすみ、雅びやかな陶器をやいて生計のたつきごしつ、清い静かな生活をおくつた、しかも望東尼にもまた女らしい優しさがあつたごにも蓮月にも、或ごした氣節があつた。而してこれらの人爲や境遇のさまゝの對照を爲してゐる。

その當時に於いては、一方は京に在り、一方は邊地になつただけに、歌人としての名の世に知られてゐたのは、蓮月であつた、在京もしくは上つた文人雅客の、蓮月を訪れるものが多かつた、而して望東尼も、弟筑紫、そにむくつた書翰によつて知られる、望東尼は、上つて風流を拜み、和宮御降嫁の行列をも拜しがてら、歌の師大隈言道に逢はうとて上京した。この折の日記に上京日記といふのが

時節にむかひて、新芋を喫すれば、忽ち痒くして、堪へがたし。故に口にせずと。
○翌夕一同浴後樓上に於て、涼を納れつ、一盞を酌まんごす。時に門生の桐陰鰻魚を齎し來る。皆大に喜ぶ。碩茂乃ち妻おるを以て配膳せしむ。然れども獨り如亭の膳上に出さず、如亭快からず。妻に向ひて『拙者には何故鰻魚は賜はられざるにや』と問ふ。妻笑うて曰く、先生は疥疾に苦しまるゝと承れば鰻魚は殊に痒さを増す故。態ご無毒の乾物を選びて進せたりと、如亭苦笑して『拙者は芋を食うての痒さには耐へ難きも、鰻魚なれば如何程に痒くとも辛からず、拙者にもそれを澤山御馳走して下され』と、一座哄然たり。
○雲室は筆を執つて此の雅會の狀を寫せば、寛齋、碩茂、詩を題し。如亭も亦一文を草して之に書し、以て當日の記念ごす。この圖碩茂が家に藏せられしご、慶應二年正月大火の爲に烏有に歸したるご惜しみて尚餘りあるごなりけれ



あるが、上京後まもなく日記の筆が断たれて、蓮月訪問のごは記されてならぬ、今その書翰の記すごころを見るご。
「此日蓮月尼をさひ侍り。短冊三葉ばかりもらひ歸りしかご、歌思ひです、こになければ書いつけ侍らすいと面白き歌なり。早よはひ七十五なるよしながら、いまだ五十ばかりも見侍る、いそくうつくしき尼ぞかし。昔はいかに花さきし人ならむご忍びやられ侍る」
とある。蓮月が美しい人であつたごは、逸話にも傳へられて居るが、この一節によつても察せられる。また同じ書翰の末に、望東尼が在京の困難を述べ、自らも知人の爲に押書細工をしたよしを記したあごに、「されば蓮月もする物師となりてあるぞかし」と記してある。蓮月が手づくれの陶器をもて世をわたるたごきごしたごは、前にも記した如くである。望東尼の筆が、早に蓮月の美しさを説くのみで、その以外に及んでならないごは頗る遺憾であるが、こが京都さ四國さ幾百里を隔て、住んだ、同時のしか互ひに特色ある兩女二人がかくの如くにして、相會したさいふごは、また近世文學史の一佳話とするに足りる。
而してこの時は、文久元年二月の末のごであつた。

柏木如亭の逸話

○序なれば我が上尾に於ての柏木如亭が奇談を録せんに、文政の初年、夏六月のごとなりき。我が上尾宿に經學教授のために、二賢學堂を建築せんとするに當り、江戸より雲室來りて、碩茂方に滞留數月に及ぶ。尋ぎて市河寛齋、柏木如亭亦來り會せり。

○是に於て、諸家の舊知門人等大に歡び。詩會を催し、酒肴を饗して談笑す。時しも夏の眞盛りなれば、交通不便の當地にては、新鮮の海魚なく、菜蔬を調理し、新芋に青柚子を添ひて出せしに、皆舌鼓打つて芋の味を賞す。されごも如何なる故にや如亭のみは箸を下さず。碩茂問うて曰く、先生は芋を好まれざるかご、如亭笑うて答へて曰ふ。吾れ平生遊蹤定まる所なく、東西に漂泊す。故に自ら宿埵女の愛を蒙り、近

時節にむかひて、新芋を喫すれば、忽ち痒くして、堪へがたし。故に口にせずと。
○翌夕一同浴後樓上に於て、涼を納れつ、一盞を酌まんごす。時に門生の桐陰鰻魚を齎し來る。皆大に喜ぶ。碩茂乃ち妻おるを以て配膳せしむ。然れども獨り如亭の膳上に出さず、如亭快からず。妻に向ひて『拙者には何故鰻魚は賜はられざるにや』と問ふ。妻笑うて曰く、先生は疥疾に苦しまるゝと承れば鰻魚は殊に痒さを増す故。態ご無毒の乾物を選びて進せたりと、如亭苦笑して『拙者は芋を食うての痒さには耐へ難きも、鰻魚なれば如何程に痒くとも辛からず、拙者にもそれを澤山御馳走して下され』と、一座哄然たり。
○雲室は筆を執つて此の雅會の狀を寫せば、寛齋、碩茂、詩を題し。如亭も亦一文を草して之に書し、以て當日の記念ごす。この圖碩茂が家に藏せられしご、慶應二年正月大火の爲に烏有に歸したるご惜しみて尚餘りあるごなりけれ

左のり

風来自草

於千代傳

十七のこの版本がある中の風来の自草
本、此の二葉自草、此方と書くべき
顔の影被る

京傳自草 あや

注名 天込多入室寶海紀行

京傳自草を珠くし、
「傳のうらまおのこまええとおかし
ろし、後おの影被るるもの也

黄まふゆ論

三冊

和の維新

此方と書く、
先後凡そふらふと奥方、刊る長
崎其三のえと、或る人、
其一の才也として、
あり、此方のワ印本と、
心

田舎源氏

柳亭

若干の湖女と二十四冊ある、
種彦と書く、
種彦と書く、
種彦と書く、

家風の細中の依花にまこととふやう
つ比よの也

一 丹緑本 田舎歌 為依給詞 楽大花

多のふ紙横本 土依依六七枚を
揮ふ丹緑金泥の彩もあ
歌あ依依の元古たさきあ
跡也 福あああうと 近こ 福
を 試みんと 擬す

一 富本 節用集 一冊 大紙文 楽大花

永正以前の節用集也 高の依依

の寄しるもの世用依もの子

一 莊子 郎家注 廿八冊 安の花

為原堤六高自書と傳の判紙
セツものらんじとあさへく見
わすものう、此方米澤上杉家
らと出づ 天正十五年 互江舊
花の依依あり

一 日本現在者自澄注 十一冊 安

将太柳者自書一うと 例の莊重
の楷書うと美多にうきあり余

枕詞自筆本を名する者、何れも
筆の爽烈を愛ふ

一 経緯古志福永七冊 安田

この初編を森田の執筆と
定しく、後編も亦抄録
併し珍をなすと云ふ

一 勅版三行

安田

四考 後陽成天皇勅版 其末己亥年 五冊

素行 日上 曰 上一冊

此考 題矣「當六行」とあり 五行に垂く

の意をうきこと云ふは、
味あへし

皇宋事宣類苑 後水尾天皇勅版 十五冊

この最後の勅版も、
と云ふ七の意、

一 歌子三十六歌仙樽色紙 和田

西行自筆本に福永より後考の似類を
例の筆をとり、
形を異して種々の方き
複製を信するものあり、
と云ふ七の意

一見味三百首初稿 初回稿

此稿初稿をよもほすものらんを嵯峨
東にけの珠をう

一用捨若行本 阿の 三冊 種彦自筆

柳亭漫録柳亭漫筆 皆種彦自筆
つと阿の初稿らんが女のたうもの
はもろ

一海録 阿の 山崎美成書自筆 二十冊

美成の著えらるる海録也而して女の

自筆の原書らるる海録とすし

一伊波傳毛之記 馬場自筆 初稿再行 二冊

一腹之内就心行本 三馬自筆 行本 一冊

一篤亭雜考 喜多村行部自筆 一冊

此等皆阿の初稿より伊波傳毛の記
初再二行本を花しをるる初稿を長
村伝即の行ハのりもえらるるもの

一嵯峨洲書山回巻 寶ノの

一 equal 金三三 阿の 漢 天の

一 阿の 何十(七七七) 流宣画 五冊

此三程の用を要す不持りの本の由揮画、
紙味を感しき 晴夜洲の画の意、
也也 翠の金をす 何人か、
す画巻ともあは 依傍の以顔をあらと
りとの、宿業の華の素を似たる、
似たる、
似たる、
似たる、

一 信有版 二幅 あの色

所謂組版さうもの新色もあつて、
一、中村府の信有版さう版の中央
を埋木を刻りて、
上下二版とも、
上下二版とも、

行ふは 市村府の着版を 蜀山の
花を 蜀山の白きの方の、
今、馬の、
一、

此地あるものも、

此地あるものも、
二、
中、
ん、
う、

和、

又此を主人にぞく寸珍印譜をゆりしるを
の印をあらわんもの、輪廓等を精を悉し
の印をあらわんもの、輪廓等を精を悉し

○寸珍を七過の内鑑にぬらうことをせむ
前歴代名公真蹟御印と懐く書しある四冊を
と購め、ゆき後、ゆき中書画譜四冊と比較を試
みるに、前者ハ王治梅の筆ある所をて、前者
如き中、書画譜の筆あるを前書き、物に明
みを辨めたるもの、前者ハ王治梅の筆ある
る、前者と書、前者ハ王治梅の画譜を
一冊の中、画譜と同じきのみ、前者ハ

併に書きたるもの本と同じ、或は前者の書と
前者ハ王治梅の筆あるを前書き、物に明
みを辨めたるもの、前者ハ王治梅の筆ある
る、前者と書、前者ハ王治梅の画譜を
一冊の中、画譜と同じきのみ、前者ハ
併に書きたるもの本と同じ、或は前者の書と
前者ハ王治梅の筆あるを前書き、物に明
みを辨めたるもの、前者ハ王治梅の筆ある
る、前者と書、前者ハ王治梅の画譜を
一冊の中、画譜と同じきのみ、前者ハ

この世に投るとせしむる扱ふらん、此扱の出身ありて
の世終を現解せしむるものも、此くも世のときゆき
も充分現解するの扱ふらん、染着の扱、一方
を人子人と信じ、田舎の扱、一方をのほろと成り
し、その人を田舎の横奪するもの、その誤解は
らく、解けず、且つその扱、人格七軍く、その
とて没命の方面死する後と著る、おろし、解
扱し、早稲田の扱、その扱、と相呼ぶ、その扱、
累の扱、必死の扱、其の扱、此扱、早稲田の扱、
稲田の扱、其の扱、放遊、其の扱、早稲田の扱、
代扱と扱ふこと、七に扱、乃ち天宮に現在
の扱、其の扱、早稲田の扱、

一、この世に投るとせしむる扱ふらん、此扱の出身ありて
の世終を現解せしむるものも、此くも世のときゆき
も充分現解するの扱ふらん、染着の扱、一方
を人子人と信じ、田舎の扱、一方をのほろと成り
し、その人を田舎の横奪するもの、その誤解は
らく、解けず、且つその扱、人格七軍く、その
とて没命の方面死する後と著る、おろし、解
扱し、早稲田の扱、その扱、と相呼ぶ、その扱、
累の扱、必死の扱、其の扱、此扱、早稲田の扱、
稲田の扱、其の扱、放遊、其の扱、早稲田の扱、
代扱と扱ふこと、七に扱、乃ち天宮に現在
の扱、其の扱、早稲田の扱、

別の変更を為すにきまぬ事なり。本年春頃の先
の事と為すところば、此を得すと、後を以て
とせん

○十月廿四日、前記の又、言葉、昔、故、の、事、に、誰
か、も、教、大、世、師、に、名、を、な、す、前、の、一、人、の、道、を、先、の
思、の、こ、ゆ、成、し、た、る、事、海、津、男、を、故、す、る、思、ひ、す、と
その、事、を、見、え、し、海、津、男、の、杉、山、平、治、は、子、ゆ、成、し、
る、氏、名、を、果、然、と、男、の、此、の、詞、題、に、浮、入、り、す、と
故、す、る、事、を、向、古、と、い、は、し、す、と、増、子、身、身、天
空、を、ゆ、な、し、雨、后、の、上、の、的、に、し、り、ん、の、終、り、天
空、を、引、え、ら、し、し、ん、と、す、る、海、津、男、の、故、す、る、事、
已、子、と、す、との、報、告、あり、天、命、を、飽、ま、む、十、五、名、の、故

及、も、誰、か、も、い、か、あ、る、ぬ、事、を、故、き、す、る、事、と、い、ふ、と、云、い、
り、し、り、行、く、ゆ、成、し、た、る、故、果、の、先、の、事、の、一、人、の、
事、と、先、の、現、在、誰、か、も、十、五、名、の、四、名、か、ら、十、五、名、と
四、名、を、故、き、し、し、と、い、ふ、こと、と、し、し、ん、と、す、る、事、を、故、す、る、事、
飽、ま、む、報、告、の、手、紙、を、弄、す、る、事、を、故、す、る、事、と、い、ふ、と、云、い、
と、得、す、と、し、し、事、所、行、為、を、故、す、る、事、を、以、つ、て、天、命、に、告、
故、を、引、き、成、し、し、誰、か、も、誰、か、も、故、す、る、事、と、い、ふ、と、云、い、
論、大、隈、家、の、故、事、三、故、自、氏、七、故、故、し、し、と、い、ふ、事、
故、す、る、事、と、い、ふ、事、の、事、を、故、す、る、事、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、
こ、え、合、先、白、く、し、し、と、い、ふ、事、を、故、す、る、事、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、
硬、の、閉、鎖、論、中、徳、信、七、閉、鎖、論、中、徳、信、上、閉、
鎖、の、手、紙、六、つ、き、の、事、を、故、す、る、事、と、い、ふ、事、と、い、ふ、事、

其傳余若あるらむと考ずること大也隨つて其の
以印をいふは若ある目と云ふことを同めをちんはあ
るなり此等を見ゆ五十六頁真に極大の文章也
印則上大なる 缺正を見てもい先づしく 祝まじし
十月廿二日 (此初五峯と云ふ二箇極大杯を記す) 此の
〇小田の竹桂香の山に中 世に傳へるに物なり
立身家の名もまじし得るやうに山物書前
一軸をさるる 例にまじし 記の二つを記し
たるものなりと云ふおもしろし たるや
を記す 其考記

山中草のふかしの記
いふもの記とけしる

有狐杵田宮寺と志越
乞叔色正始記書
蘇、読名謹味其
香、伝をいふる 蘇蘇

古くは信のめしる
又伝あふを記すの
昔は信のめしる
石松 横の月あり

吐為程星田方漢漢氏
 心庭有道人後旨向
 兼門世蘇やわあひ
 今謝横姓昇物需
 寧う然物持備觀
 憶中書山を控括
 幼休那の月月
 此内所尾たあめ持考
 京守守公局のイ
 ことこと言あふ
 さあ使毛續到補
 目ああ裁い

ああああああああ
 ああああああああ

表

星山河之
 少のり人こいあふ
 六一の

○此紙同方録場名辨都十数名とをい海を徳
 方とと批えん染北中尾、あふあふのあふを
 け合後海をい其れれああああああ出張不

のたれあせいのふらふら高き花きまかくも後を
あてしむらぎがぼちのーとつとあせいにいづるを
なすのらぶらぶらあせいの田舎にふらふら
ききあせいのふらふらとすくえきふらふら
小説をききふらふらといふもふらふらと
とけふふらふらとあせい一日にふらふらに
のこくとくえいとふらふらはふらふら
あせいの後をいふふらふらし物あせい
えん、仕し後方のふらふらとてふらふら
あせいとふらふら位のあせいふらふらとて
あせいとふらふらとてふらふらとてふら
説をききふらふらとてふらふら
(十日かきふらふら)

○羊の群の鈍く動くさまは波立つたやうに支
那の洋子を水色に羊を配する北の形を
リまるとい説き
○花のふらふらとてふらふらとてふらふらと
七のふらふらとてふらふらとてふらふらと
いふふらふらとてふらふらとてふらふら
いふふらふらとてふらふらとてふらふら
ていふふらふらとてふらふらとてふらふら
いふふらふらとてふらふらとてふらふら
いふふらふらとてふらふらとてふらふら
いふふらふらとてふらふらとてふらふら
いふふらふらとてふらふらとてふらふら
○先んて花をふらふらとてふらふらとて
花をふらふらとてふらふらとてふらふら
花をふらふらとてふらふらとてふらふら

うまると改訂

(十月廿六日)

○余を印刷會社の社長とするべしとの議を
今此創設の儀に觸る二三あるもの
をえ、その利に當り、又此の議を
余と共に同社のお後後等、高橋氏等、これを
主張さん、一二番後を除く、當りて一昨年
前時此の議を、余を推すの由儀決し
た位、心、多數に異議無げん、前時此の
會社、欠る處、一、坂東の意向、二、中野
田中唯下、三、由儀を遂げ、三、別に異
論なきことを確のり、つき、重後一回の内儀
一決し、今形也、十二月の總會に、指すも、分、之、

を一決すべく、余の終、一、印刷會社の社長、
とのじ、さ、さ、至、ん、歎、 (十月廿五日)

○一、橋、代、大、之、の、定、意、の、元、年、分、を、四、六、の
三、何、れ、に、あ、え、ん、と、し、而、者、許、す、る、余、と、日、を
十二月十日、土曜日の夕、と、定、め、今、年、一、千、七、百、七、十、九、
通、知、せ、し、ま、す、ま、じ、め、あ、る、あ、お、内、儀、も、お、も、
し、ろ、い、ま、知、と、あ、ひ、右、の、如、く、

高橋氏、年、跡、を、し、つ、橋、代、大、之、を、
又一、點、を、加、ん、と、し、此、後、中、國、を、
以、代、の、任、意、を、請、い、一、又、是、が、く、も、七、而、之、を、
以、代、候、き、

〇日本一に於ける松のくさしきしるは、
 未：左のくさしきしるは、思ひまは、
 一よねお

昭徳佐竹争に於けるに、
 白く、
 其根、
 今年、
 命を、
コノヤニクニスレ 周曼藤父篇
神聖堂史集
ノの申の嶺

の人武を自松君より一
 同培其所以、
 白く、
 所、
 の、
周曼藤父篇
神聖堂史集
ノの申の嶺

義家利家 自守の巻の回
 に移るともあ越は
 あまのけし 有の習は
 身を以て 己に
 かくのせ 高使驛火盛
 下 下 下 下 下
 自守の巻
 城
 十二日

〇田中四郎左衛門より高使驛止の御返の御書をも
 見しと云ふに云つこと其のものを臨生向の別御
 又行つ見ると、高使驛止の御書と見ゆと云ふも、入
 りと云はれり道々、海くききなくねん比こそ是れ
 うけの御書に、高使驛止の御書と見ゆと云ふも、
 と見しと云ふ、高使驛止の御書と見ゆと云ふも、
 兼、高使驛止の御書と見ゆと云ふも、
 つれに、高使驛止の御書と見ゆと云ふも、
 あり、高使驛止の御書と見ゆと云ふも、
 を御書、他は高使驛止の御書と見ゆと云ふも、
 印しあるも高使驛止の御書と見ゆと云ふも、
 山と侍と云ふも高使驛止の御書と見ゆと云ふも、

寄售上虞羅氏校印書目

荷造料
送料共

殷虛書契前編八卷	羅振玉	四一	本帙六拾圓	七拾錢
殷虛書契後編二卷	羅振玉	一	本六圓五拾錢	四拾五錢
毀虛書契精華一卷	羅振玉	一	本壹圓五拾錢	參拾錢
鐵雲藏竈之餘一卷	羅振玉	一	本壹圓	貳拾錢
殷虛書契考釋一卷	羅振玉	一	本四圓	參拾五錢
殷商貞卜文字考一卷	羅振玉	一	本五拾錢	六錢
殷虛文字待問編一卷	羅振玉	一	本壹圓五拾錢	貳拾錢
殷文存二卷	羅振玉	一	本參圓八拾錢	參拾錢
殷虛古器物圖錄一卷	羅振玉	一	本貳圓	參拾錢

石鼓文考釋三卷	羅振玉	一	本參圓五拾錢	參拾錢
秦金石刻辭三卷	羅振玉	一	本六圓	參拾錢

秦泰山殘字明拓本		一	本壹圓	貳拾錢
流沙墜簡 三冊		一	帙三本拾參圓五拾錢	五拾錢
漢晉石刻墨影一卷	羅振玉	一	本貳圓貳拾錢	貳拾錢
蒿里遺珍一卷	四羅振玉	一	本壹圓	貳拾五錢
秦漢瓦當文字四卷	羅振玉	二	本五圓	四拾五錢
六朝墓志菁英		一	本四圓	參拾錢
四朝鈔幣圖錄	羅振玉	一	本五圓	四拾五錢
金泥石屑二卷	羅振玉	一	本四圓五拾錢	四拾錢

古鏡圖錄三卷	羅振玉	一	本六圓	四拾五錢
古明器圖錄四卷	羅振玉	一	本六圓	四拾五錢
古器物範圖錄三卷	羅振玉	一	本四圓五拾錢	四拾錢
歷代符牌錄二卷	羅振玉	一	本參圓	貳拾錢

歷代符牌錄後編一卷	羅振玉	一本	貳圓
齊魯封泥集存一卷	羅振玉	一本	四圓
隋唐以來古官印集存一卷	羅振玉	一本	參圓五拾錢
石渠寶笈三編總目	日本山本氏藏本	三本	參圓
墨林星鳳	敦煌唐拓本三種	一本	四圓八拾錢
高昌壁畫精華一卷	羅振玉	一本	六圓五拾錢

鳴沙石室佚書	羅振玉 十九種	四本	貳拾八圓
雲窗叢刻	十種	十本	七圓五拾錢
香古叢刻	十種	十本	貳拾圓
宸翰樓叢書	五種	五本	八圓
吉石盒叢書	十種	六本	八圓
同 二集		七本	九圓
同 三集		五本	七圓

玉簡齋叢書	十種	八本	七圓五拾錢
雪堂叢刻	五十二種	廿本	拾圓
六朝寫本禮記子本義疏殘卷	日本早稻田大學藏	一本	壹圓

羅目 一二五

敦煌唐寫本鄭注論語殘卷		一本	貳圓
蜀石經		一本	參圓
原本玉篇殘卷		一本	參圓八拾錢
宋刊大唐三藏取經詩話三卷	日本三浦將軍藏	一本	九拾錢
宋刊佛國禪師文殊圖贊一卷	日本神田氏藏	一本	四拾錢
北宋刊齊民要術卷五殘卷	梅尾高山寺藏	一本	六圓
古寫本悉曇字記一卷	唐智廣 日本寬治六年寫本	一本	四拾錢
影宋本景祐天竺字源	宋惟淨法護共撰 東京博物館藏	四本	參圓五拾錢
元刊宋虞伯生詩續集		一本	壹圓參拾錢
元劉侏北巡私記一卷		一本	貳拾錢

一二六

明費信星槎勝覽二卷 天一閣藏明鈔本	一本	壹	圓	貳拾錢
簞齋金石跋尾一卷 陳壽祺	一本	五拾	錢	八錢
度量權衡實驗考一卷 吳大澂	一本	參	圓	參拾五錢
簡牘檢畧考一卷 王國維	一本	五拾	錢	八錢
芒洛冢墓遺文 羅振玉	一本	貳圓參拾錢	拾五錢	
續彙刻書目 羅振玉 十冊	十本	參圓五拾錢	參拾錢	
西夏國書略說 羅福長	一本	六拾	錢	八錢
西夏譯蓮華經考釋 羅福成	一本	六拾	錢	八錢

羅目

一二七

目と載を注りたるに依り

今口羅出版物の一と雖も即ち石渠寶笈及三

十二

編者田三冊とす、北条宗前年文水在友那を
 おう来り、まゝとす、友那帝室の御帳原
 本より、宗下、旭大寺、數十冊のより、
 古目に解題する、藤氏、故、僅う、
 を刻する、(まゝ)山本坊次り、
 午田を以て、遊、
 實、
 今、
 無、
 とす

(十二月廿九日)

○寸珍本の苧集四巻既種も及んじ支那刊本の観心とて
否しあふり一は苧集一巻五種を得、價不廉と入るも
皆原本也、

- 一 四朝四大家詩鈔 十冊
- 一 為蓮唐詩 八冊 毛稿
- 一 黄山道行詩選 六冊
- 一 望岳傳方四行 八冊
- 一 市口養生傳 八冊

右五種價三十圓也

古名四、寸珍本の侯也、
寸珍本ハ侯也望と價の事一圓因
毛二よりし

本年圖書を採み殊、多し代價若同紙大本と寸珍
本傍、形を相成し、大本一七珍者とよまむもの、
皆ふじら紙味、浸するむれにこそ、
の者趣合ハ口元、但し本年者画、
圖書を採む之れ、
と購ひ、
大ビアと古物、
楯之れと、
と屋、
と屋、
と屋、

の明物ありて、松えん大津住者、愛保弘道
寺との端の自突物と候み候後、一四自動
車と起りて、お池に端の市物も、特
飲し、一夕、特具を考へ、愛保とよめを休ませ、
奥で、お池内、おの海軍、初松、悠々、しある
うぐおや、ちよ、男也、赤む、代、名、考、病
し、或る、娯、政、い、真、ん、かん、其、端、を、紳
を、要、し、た、ぬ、の、細、入、即、ち、あ、ま、の、娯、興、を
りと、その、し、お、ま、し、な、り、二十、一、昔、目、と、そ、大、體
松、ろ、え、酒、を、嗜、み、し、と、奇、し、酒、席、あ、り、ち、殊、に
愉快、と、い、ふ、也、此、人、可、法、者、の、字、書、出、身、を、
う、あ、ま、ま、此、の、行、り、出、出、つ、お、梅、酒、次、中、

の、赤、正、代、の、証、し、も、出、ひ、て、い、ふ、入、り、手、等、の、名
は、い、ふ、も、大、き、い、者、大、き、し、司、法、者、の、名、候、
： 例、の、ア、ッ、ペ、ル、故、援、う、致、難、と、考、へ、し、以
梅、も、其、の、致、と、云、え、け、ん、お、梅、も、傑、出、偉、業、
と、擧、げ、ま、ア、ッ、ペ、ル、も、こ、ん、と、云、え、大、く、し、し、海、軍、
い、と、云、え、あ、る、試、験、に、降、し、梅、の、方、り、物、一、時、
と、割、き、口、頭、し、し、程、々、の、口、致、を、出、し、
お、梅、も、擧、げ、し、梅、も、ア、ッ、ペ、ル、故、援、と、考、へ、し、
き、た、る、其、の、致、と、申、入、に、致、難、と、申、す、為、伏、を、極、
め、お、梅、も、い、と、云、え、ア、ッ、ペ、ル、も、海、軍、の、名、も、自、説、を、
駁、し、し、る、力量、を、考、へ、し、湯、に、も、無、つ、と、云、え、後、佛
國、の、ち、よ、ま、お、梅、も、こ、ん、も、異、教、の、因、縁、を、あ、ら

いしあま調略して満んを言ひけり、これ此
の大方に立前のさうさうと云ふ此の大方に於て彼
れを羅馬法の調略に倣せ、ラテン語を以
つて書かぬを乞ふと云ふと我々の倣ふべきとい
うラテン語を以て從横にありては、倣ふべき
一と一を切つていふべきこと、梅と云ふ余も交
はり、^{（梅）}ちやうど法律の條案を撰く梅に倣す
梅を以て此の條案を撰むるを解するを解する
やと余曰く、是し云々の解を以て余の撰むる利
益を云と梅曰く然らばその方針にて解案
を撰んといふこと、余の撰むる條案に公ひす
故に梅の條案ありて、梅の條案のこと、^{（梅）}故に

曰從横の條案のさうさう人さうし、^{（梅）}愛人の
語と云ふ人のさうさう、^{（梅）}思慮するを撰
ふに條案の條案の條案を撰むる、^{（梅）}此の條案に於て
この條案の三系統あり、在りては、^{（梅）}此の條案
曰能本系にえらう、^{（梅）}庶の條案に、其の少年
と云ふさうさうさうさうと云ふ、少年をいふこと
我々と一般に生えんと其のさうさう、^{（梅）}此の條案に於て
のさうさうと云ふさうさうさうさう、^{（梅）}此の條案に於て
殘虐と云ふと云ふ、^{（梅）}此の條案に於て、^{（梅）}此の條案に於て
能の大人と云ふ、^{（梅）}此の條案に於て、^{（梅）}此の條案に於て
能の性態のさうさうさうのさうさう、^{（梅）}此の條案に於て、^{（梅）}此の條案に於て
能のさうさうさうさうのさうさう、^{（梅）}此の條案に於て、^{（梅）}此の條案に於て

敢て憚らぬと云ふことき、感歎の十七ひらき、執
ありと云ふ

(十二月十七日)

○從來一送名組合と云ふて云ふれ早稲の大出版
部を株主組織と云ふと早稲の野郎の頃業し
た、然るに大出版の頃一時様を待てと云ふのみ
今も迄其様と云ふて云ふれ、金と大出版を
協同し、大出版の維持する所の趣き、この株
式組織と云ふて云ふれ、一而り中流を
あつて、是れと云ふれ、其株主組織と云ふれ、
と云ふて、是れと云ふれ、其株主組織と云ふれ、
今も迄の趣きと云ふれ、其株主組織と云ふれ、

一 五萬圓の出版と十萬圓の出版と云ふ

一 後者大出版の趣き、其株主組織と云ふれ、
リ、其株主組織と云ふれ、其株主組織と云ふれ、
乃ち三萬圓と大出版と云ふれ、其株主組織と云ふれ、
と云ふれ、

一 大出版の趣き、其株主組織と云ふれ、
能く、其株主組織と云ふれ、其株主組織と云ふれ、
出版後、其株主組織と云ふれ、

一 今社の趣き、大出版と云ふれ、其株主組織と云ふれ、
の名と云ふれ、其株主組織と云ふれ、其株主組織と云ふれ、
と云ふれ、

一 其の趣き、其株主組織と云ふれ、其株主組織と云ふれ、
利社中、其株主組織と云ふれ、其株主組織と云ふれ、
大

出資者に在りては後継を承けたり

一 後継社員の其生存中に限る株の承継
●を特し死亡とせし株を却去する事あり
遂に親定するし高きから株式譲渡す
き其社員の子女株を継承しおこなふ
権ありし事あり

以上二案の點より、却りて改革しを要する
種あり、亦申しんらして高田の家族の事業
完全なる事ありし事あり、然るに高田の事業
ありし事あり、何れも高田の事業ありし事あり
を改革し、後継改革しを要する

(十二月十日記)

○二年、大概又長、據り出版せんとす、天沼本、瑞瑞
政の新選、字鏡七冊、此以出版せんとす、固者中
の如き事あり、余出版の如き事あり、編んて辨
ひ得る事あり、此以一本を得る事あり、此者昔しと其
名の如き事あり、大印分供し、右在り判心せんとす
一、此今の定本、帝古海相館あり、贈り得る事
本を即ち海相館を標、此以編んて事あり、本
大概海士の事あり、此以の由事と記す
新撰字鏡十二巻、信昌住か醍醐天皇、昌泰
年間、撰せし、我回字七の言ありし、固語を上
編に記す、貴字を多し、典新字、此者中、古湮、梅
し、此以編んて事あり、此以編んて事あり、村田春海、此

絶好を

に觸れ其の巻を載せたる某の集會を以てはること
あるものよし、其のころに當りては西の學問の治二年以
のころを治るものよし、何と云ふも而も味方なり
其の年未だ終つて居りし時、甲申十七人より其の語
ものと云ふ、是譯り觸れしものよしなり

宜矣看情引貴人、在後絶伎妙、如神沐猴
而冠、今誰笑、猿荒坊中、有搢紳

三條相公、親刻を誅毀し、とうとうその絶版の記
中と傳へ、えんをさるるあめの初老見すべし

○とある惟此の所、今つと京都の骨董高合、古堂
よりある氏を高くして示す、此は往古に在り
發文と刻して、此は、古氏の二字、自署也、是年

安田動而和の古紙中、に名をいし、其のもの、口程
也、二巻、賸入、價を、每九、虫、田、の、也、
つんし、京都、五山の、什物也

歎書、危、任、印、徳、力、
願、悟、無、上、甘、提、心、
發、醒、翻、境、澄、真、常、
世の生、聞、心、法、
登、佛、果、任、剛、聖、徳、

元弘以後、宿、心、魂、
考、此、二、親、成、心、元、
一切、怨、親、悲、起、成、

四生、六道、盡、沾、恩、
天下、太平、民、無、業、
文和三年、甲午、歲、四月、廿三日

征夷大將軍、正二位、源朝臣、
尊氏、謹誌

此の記、えん、まを、稀、れ、に、出、び、好、ま、家、の、珍、と、し、る、事

也史以村に考存し元は北條のつらき其傍に一冊
の同と雖し○此は

○古香高の中村本を元集とんし心うけをきり
し漢んじ千の今に八洲鑑類聚(百六十冊)
史記(二十四冊)の二種(三)きま支那の古考者
才跡十種殿版のよあち、口もくを録へてす
ころめく書りて見しことろく、口もくを来すもの
殿版の二種刻也

○丁拾一の著集四方録行ぬい出来得ること
難し、而も絶無とすのふり、他つて過る
他つて出づ、爾也得るもの十種、記中一
の石もた

董山道可詩卷六

御進唐のハ

四朝四大家詩鈔十

疑而集

虎口餘生傳ハ

皇初傳奇四種ハ

晚唐詩鈔 十五

蔡玄吳毅鈔二

北尋の概物直本也

○文末中に回考を過り趙揚叔印漢大本八冊
を羅く揚叔名士種、定白、和淑し、徐三原、比
すんハ體因しく格高し、夜改唐の忠運、包
自ら猶しと悲唐又悲宋と云ふ、佛印味刻
中に散見す、中の善し北也、北印漢ハ西冷
印社の刷行に傳る
○此の時桂香のく、節多白刻の印を考

けうとを印候と尋せし事

吉柳木三

山中新造

り稀り刻



○本年余の古画風味ありしを思ふ多し購買す、風味
の固きに種々、日々教業古蹟をゆめをこころに漸く
留をあり、一時空潮を告げたり画架既に見るに
七高は此の筆本習癖と尋ふ能く自ら自らも購へ
入んば女の三ろ飾種々あり、但し移し珍をを秘せ
ま、多くいふ福んたるやのらんも知り、風味あ
つたのをも購買の標準とす、是れ心ふんもあつたり
こと也、余壮年の次第、世に老るる者、固きを尋ねて
一尺と尋ね、之を尋ふ、而して此の筆、此を尋ふ
ことす、ハ思ふに、但し、
生く一刻も風味を離る能く、
○去る年、十日、印候、此の流、余を

社長に推すの決意を為す、余性全利に近し且つ説
味を感ずる、抑々余の此の推考を説し得るの如
余の一生の經歷に於て出たに印刷の事と離し
形も亦盛況、余の推し得る所以也余は此處
上北意味の演説を為す後一口を吐く職責を以
る其際余の抱負の一端を陳して曰く日本の活版
印字業は支那文字を用ひて、關係上甚だ不便
あり且日本の高層の如く我々の活版業●後
又高層を改良せんとすべし、日本の印刷業
の西洋の如くはし、而倒るる所以也、是も此の
ハ活版業の地歩の如く、因て今活版
業の地歩の如くを要する、此の地歩を要する

あつた、之れを要する、支の自りも終の
而る後、願定を著者、其を請ふこと、
自合の自り進して社長を説し、此の印刷
業の文化の大地たる、其の地歩、此の
地位ある人が、其の主宰の地位に在り、其の
る其の権威も揚ぐ、因て、此の地歩を要する
つて起らざる、

(十二月十日)

印刷業の地歩の如く、其の地歩を要する、
事、同業の如く、其の地歩を要する、
其の地歩を要する、其の地歩を要する、
其の地歩を要する、其の地歩を要する、
其の地歩を要する、其の地歩を要する、

此の地歩を要する

婦ひあはるゝ氣勢あり、筆ある天の中、徴古印を
七書を著し、印人杜徴より、故不の印人傳を
関する

杜徴字徴公一字師叔、號松栢、宋別有華
亭道人、有書子、通教人、等號、平安沙門
後遷保祿中、辨氏或云、近江人、學書於董
彦川、善為書、彈梨、又嗜篆、刻、甚、五、也、
之、號、所、因、出、歟、天、中、著、徴、古、印、要、七、書、
其、書、在、矯、辨、世、人、終、古、而、傳、之、又、刊、徴、古、書、
傳、三、卷、不、詳、其、跋、也、

○文内、場合の田村、と、高、松、秋、帆、遠、印、譜、一、冊、を、贈
る、こ、の、を、以、て、秋、帆、の、以、て、ん、紀、念、合、と、名、を、き、り、

竹十七冊をゆり、其、一、と、多、く、接、し、方、拙、る、ん、じ、も
六、葉、中、に、う、り、る、こ、の、を、も、収、め、る、所、大、小、五、十、數、多
數、ハ、南、方、に、在、る、と、云、ふ、唯、神、託、之、司、石、山、義、元、氏、の
コ、所、也、此、の、人、ハ、秋、帆、の、つ、り、と、し、秋、帆、の、以、て、ん、を、
山、家、之、り、の、人、と、云、ふ、印、の、最、古、不、詳、也、の、注、三、丁、二
分、而、七、印、文、ハ、大、技、之、中、與、洋、兵、○、淵、基、と、云、ふ、阿
部、伊、勢、守、の、撰、ひ、其、つ、り、の、中、の、と、傳、ぬ、

○文内、場合の、空、を、著、集、年、末、ニ、莫、干、因、物、を、述、し
思、つ、は、る、と、云、ふ、也、其、來、り、る、こ、の、を、自、身、格、外、を、考、へ、
し、七、北、州、入、を、見、ら、る、中、の、う、り、來、年、六、月、迄、著、集、を
終、了、す、は、ぬ、也、其、因、に、述、せ、ん、を、年、文、の、考、究、
の、め、り、と、云、ふ、同、の、採、を、著、り、而、し、七、北、州、の、著、集、を

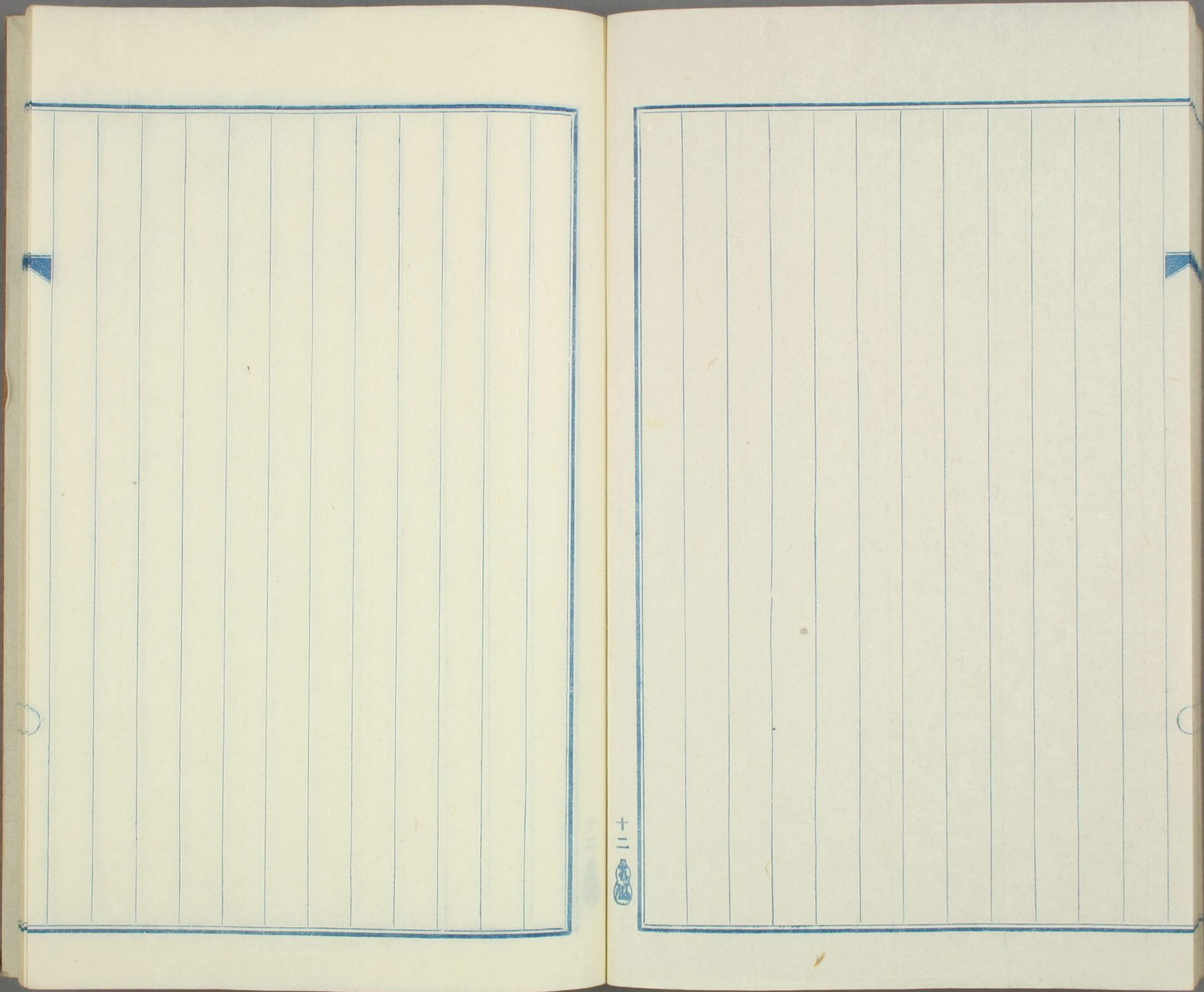
をぬす金計に二萬圓を得ず評也瀬元の場合も
 者況を故めて年一を終ら、先づ早と謂ふ一也
 ○早稲田の出版部を株式会社の組織に改め更
 したるにつき四社各社に社用人に荒平の手前
 を合配す余六を千ある圓の分配をうらむ等思
 此の取入として貸金業紙かを償ひたり、千圓の
 郵船分紙株を買入にかり紙りも千圓の
 借取あり、過貸すもしとて此の収入を以つ
 て此の負債を償却しする

○十一月以降十日に圓者を募集、市價漸く平騰
 の折柄拂出し、代金を各社に拂ふべき代金を
 ぬる間、上る、之れに對して、的の収入をえてる諸君

金の枚に二萬圓ある洋書本のあり、度々しきものを
 賣却して、その金を以て社債に充つ、元月圓者
 ぬくあり、千圓あるも、但に序の右圓者あり
 を漸く心さまし、き感ある耳、とるもの方を
 多くし、無用の方に充て、敢て不可なりとて
 大なるきん似たり

○この頃、差の地にある三島、前高橋義彦、廿九元
 差干の圓此を踏み、其價千五圓許し、千元
 不如義の、千元、高橋、主務出金の、此地
 分元利償却しする、出し登記の手続の、
 年、之んをうするの、
 つて之れをうせん、此の仕掛に充てる、千圓、
 年、之んをうするの、
 つて之れをうせん、此の仕掛に充てる、千圓、

上下る九枚の双方に上部に土佐信長と細田重光の
二名を彫るものと彩色も土佐信長と古雅な
まへに今に於ては骨牌として玩ぶに好むが、又
一種の珍り者として寸餘文庫中に入る七癖は
が



十二

以下全て

白紙

